
ストーリーコレクト

クイックロード

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ストーリーコレクト

【Nコード】

N3013J

【作者名】

クイックロード

【あらすじ】

『シューティング・スターロックマンWorld/Wave/Beat title』、『cord number08』、『chaos』、『michael』、『spec』、これらに関連した番外編集!!

初めに

どうも、作者のクイックロットです。

これを読む際には、『chaos』、『cord number 08』に関する必要な知識を持つてお読みいただけると幸いです。

また、場合によっては『シューティング・スターロックマンWorld/Wave/Battle』、『michael』の知識が必要となります。

更に、作成予定の『spec』も今後必要となってきました。

少なくとも、『chaos』、『cord number 08』、そして『spec』が掲載された後は、『spec』……この三つの知識を持った上でご覧ください。

さて、前置きはこころへんで……。

この作品は主に、『番外』、『重要』の二つに分けられます。

『番外』は特に本編に影響が無く、作者の気まぐれで書いただけの作品。

『重要』は今後、本編と関わってくる重要な作品。

様々な話が詰まっていく予定の本作ですが、主にこの二つに分けられます

では、今度更新した時にでも会いましょう。

エンド・アフリク・バトル（前書き）

アフリクでの戦争が始まる——ッ！

エンド・アフリク・バトル

アフリクの防衛力が極端に下がった。

これは誰の目から見ても明らかな事だった。

正体不明の力を扱う敵軍に攻め込まれ、アフリク最大の戦力である「兵」が数百人失われた。

大規模戦闘は最都市部で行われたのだが、それ以外にもアフリク中で戦いが起こっていた。

その為、死者が数十人しか出なかった最都市部に比べ、他の都市や村の兵はほぼ壊滅している。

オマケに『四大元素技術』が発動されてしまい、『四大元素技術』への保護が足りない、と政府への不信感を国民が持つてしまっている。

『四大元素技術』自体は過去にアフリクを訪れた、『アース機関』が渡っていたバックアップで復旧したものの、もはやアフリクに開いた穴は埋められない。

こうなれば、アフリクの財力、土地を狙って何者かが動くのは当然である。

『ジェネラルショッピングシティ』の支部を二ホン中に置き、身寄りの無くなった子供を回収し、兵士として育て上げ、それを国の自衛などに利用する気まぐれ組織、『ロイヤル・ワースト』を持ち、アメロツパの政府からも一目置かれているアレツサ『ジェネラル』…彼女は更なる利益を狙い、『ロイヤル・ワースト』を動かす。

『ロイヤル・ワースト』はアレツサ『ジェネラル』が築き上げた戦闘

集団だが、時たま国の防衛を行う事もある。

その為、アメロッパ側もアレッサ・ジェネラルに不用意な手出しは出来ない。

今回の侵攻を止められなかったのもその為だ。

それに、元々アフリクは『ロイヤル・ワースト』とは敵対関係にある。

兵力を有するアフリクがアメロッパからの依頼を受けた際、『ロイヤル・ワースト』がその依頼を勝手に成し遂げてしまったのだ。

『ロイヤル・ワースト』は嫌がらせとしてアフリクの仕事を横取りした訳だが、アフリクも黙ってはられない。

直接的な攻撃には出なかったものの、アレッサ・ジェネラルへの財産の給与をストップ。

つまり、『ジェネラルショップシティ』やその他のアレッサ・ジェネラル資産を全て国から消したのだ。

『ロイヤル・ワースト』とアフリク……双方が双方の主張を持ち、それ故に衝突する。

アフリクを舞台とした『戦争』が、繰り広げられようとしていた。

「あゝら。私を誰だと思っているのかしら？」

何とも使い古された言葉が飛ぶ。

彼女の視線の先にあるのは、一つのモニター。
そこに映るのは、褐色の肌をした初老の男性。
アフリクを治める、それはそれは偉い男性だ。

それに対し、金髪青目の女性は平然と——いや、見下したような態度を取る。

「出来るハズが無い、ねえ……？ 出来るわよ。 古めかしい一国だなんて、簡単に潰せるの。 それこそ、そっちは既にボロボロでしょう？ …… 結果は目に見えているわね」

『貴様ツ——』

「私はね、アフリクが大っ嫌いな。 古めかしい文化なんて大事にして、どこぞのムー文明みたいだわ。 泥まみれな田んぼ作業やって、汗臭い兵力戦を大切に……ム力つくわ。 『庶民』以下の『奴隷』……いや、それ以下の『野蛮』な民族を見ると、私は放っておけなくなるの。 そういう事だから……潰させてもらっわ」

返事を待たずに、速攻で通信を切断した。

それからすぐに通信機を握ると、新たな番号を入力する。

通信相手に対して指示を飛ばすアレッサ・ジエネラルの表情は、歪んだ笑みへと変わっていた。

「……攻撃開始よ。 十五のルートに分かれて、アフリクを落とす。 『野蛮な民族』と『富豪な貴族』の違いを、見せ付けてやりなさい」

直後、爆発音が轟く。

アレッサ・ジェネラルの笑みが広がった。

秘密裏にアツフリクに基地を築いているアレッサ・ジェネラルだが、その事は政府に知られていない。

今頃、アツフリク政府はアレッサ・ジェネラルの本拠地があると思われるアメロッパに探りを入れているだろうが、それは意味が無い。

何故なら、アレッサ・ジェネラルはアツフリクにいるのだから。

「まったく……野蛮な民族はこれだから……頭を働かせる事が出来ないのよ。私がアツフリクにいるって事も、通信電波に探りを入れれば分かる事でしょうね。さて、あなたは姉と同じような失敗はしないわよね」

話を振られた金髪の少女は、小さく頷いた。
そして直後に笑みを見せると、こう言った。

「アリサと同じ道は歩まない。私は母さんと一緒にいる——それが最も利益になるしね。『正義』なんてものを選択して父さんに着いて行ったアリサはバカとしか言いようがない」

「全くその通りだわ。私の下にいれば、金も名誉も手に入るとい
うのに……アリサやアノヒトも、所詮は『野蛮』だったって事よ。
まあ、あなたはそんな失敗は犯さないでしょうけど」

「勿論……私は、『利益』を最優先にするから、絶対に『野蛮』な
行為はしない」

少女はニタニタと笑うと、パスコードを使って部屋から出て行く。
アレッサ・ジェネラルはそれを見て微笑みを浮かべる。
優しさや儂げは無い。

その微笑みにあるのは、残虐な喜び。

「（……これだから、……これだから猿狩りは止められない。あ
あ、早く猿どもの悲鳴を聞きたいわ……）」

アレッサ「ジェネラルはアフリクの国民を人間とは認識していない。

ただ、殴られるために存在する猿以下の存在だと考えているのだ。

少年、エワテオはアフリクの『闇』を知る人物だ。

ニホンやアメリッパといった先進国が当たり前のように作っている
『闇』。

当然、アフリクも『闇』を持っている。

ニホンの『闇』が国の利益を追求するモノだけなのと違い、アフリクの『闇』は国民と国を守る為に存在する。

内敵、テロリスト、外敵……こういったモノは、歴史上でも沢山出てきた。

これらの内、サテラポリスが対応できなかった敵を片付けるのがアフリクの『闇』だ。

国の利益を追求するのではない、国を守るのだ。

類稀な才能である『単独電波変換』を持ち、『闇』に属するエワテオはこれを熟知していた。

エワテオの過去は親から虐待され、死ぬ寸前まで行った所をアフリク政府が見かね、助けてもらった……という壮絶なモノだ。

助けてもらった引き換えに、エワテオは『闇』に加入した。

『闇』に一旦踏み込んでしまえば、敵を必ず殺さなくてはならず、毎日毎日特訓に明け暮れる日々が続く事となる。

だが、エワテオはそんな環境でも幸せだった。

親から虐待され、暖かみを知らなかったエワテオにとって、同じ『闇』の中にいる同士は仲間となった。

初めての友達、仲間——一般人のような暖かい友達関係や仲間意識は築けなくとも、エワテオは満足だった。

そして何より、国民の笑顔を守っている、という感覚が嬉しかった。

だが、エワテオはこの目で見た。
いや、見てしまったのだ。

爆破に巻き込まれ、死んでいく人々を。

『ロイヤル・ワースト』に怒りを覚えると同時に、疑問を覚えた。
何故攻め込まれるのか、何故殺されなくちゃいけないのか。

こちらは何も悪い事はやっていないハズだ。
なのに、何で攻め込まれなくちゃいけない。

エワテオの座っている背後で、小さな子供が泣く。
親族を無くした男性が、静かな涙を流す。

孫を失った老人が、咽び泣く。

耐えられなかった。

何でこんな事になるのか、確かめたいと思った。

この人達が悲しまなくちゃいけない理由を、突き止めようと思った。
エワテオは静かに立ち上がる。

『闇』——つまり、アツフリクの裏に隠された最大の組織、『ラン
ドバリア』からは、先程から出撃命令が下っている。

仲間が死ぬ瞬間を初めて見た。

自分と洞窟まで一緒に逃げてきた仲間が、失血で死亡した。
出撃命令を出され、仲間の為に飛び出していった人々の何人が死ん
だだろうか。

だが、エワテオは迷わない。

今までと同じく、戦い続けるだけだ。

それが笑顔を生むなら、それで幸せになれるなら。

拳を握り、エワテオは飛び出す。

アツフリクの防衛を勤める、サテラポリスの最高戦闘部隊は絶句し
た。

二日前にも、三対の翼を持った、高圧電波体が最都市部で戦ってい
た。

だが、その時はあまりにも想像を絶していた為、何の反応も出来な
かった。

だが、今回は違う。

人間の許容範囲内の出来事の為、ただ絶句するしか無い。

一人の少女が、黄金と赤色の混じった電波の塊——蛇のような形をしている——を次々とサテラポリスの隊員へと放っていく。

これだけならまだ分かる。

だが、問題なのは『大きさ』だ。

蛇のような形をした電波の塊は、二ホンにあるTKタワー十個分の大きさがあるのではないか、というぐらいに大きい。

もはや絶句するしかない。

戦う意欲を削られる。

「誰も敵わないみたいだね！ さすがは時代遅れの民族！ 私達みたいな民族には敵わないんだよ！！」

電波が、叩きつけられる。

それと同時に数人の電波人間とウィザードが吹っ飛ばされた。

電波変換できない人間は最新鋭の電波兵器と防御装甲に身を包んでいたが、それすらも壊される。

「私一人で制圧出来ちゃうかなー？ 何せ、私には『異次元』とか呼ばれるモノの力を引き出す道具があるし！！」

ドンッ！！！！ という砲撃音と共に都市のタワーが爆破される。

これは少女の仕業ではなく、他の『ロイヤル・ワースト』隊員によるものだ。

「あつは……あははは！！ 圧倒的だね！ これぞ快感！！」

『ランドバリア』の残り人数、二百三十人。
対する『ロイヤル・ワースト』の方は、三千六百人。

アッフリク全体の戦力は、『ランドバリア』も含めると五百六十人。
桁違いだった。

誰もが脱力し、その場で絶句するような、そんなレベルの戦いだっ
た。

例え人数の壁を突破しようとも、『ロイヤル・ワースト』を束ねる
あの少女を倒す事は出来ない。

アッフリク側も、既に人員の保護に人数を割き、戦場には『ロイヤ
ル・ワースト』のメンバーと死体しかない。

アッフリク中でこのような事態が起こっていた。
誰もが絶望し、『ロイヤル・ワースト』が笑う。

そんな状況だ。

なのに、――。

少年は、平然として戦場に立っていた。

『ロイヤル・ワースト』の軍と真正面から睨み合い、ただ立ってい
た。

たった今駆けつけて来たばかりの少年に対し、宙に浮く少女は顔を
しかめる。

「……何しに来たの？」

「――お前達を倒して、アッフリクを守る。それが僕の誇りだ」

「へえ、……随分と勇敢なんだね。馬鹿つみたんだけど、その勇気だけは褒めてあげる。私の名前はシャリサ「ジェネラル」……別に孤児って訳でも無いんだけど、一応は『ロイヤル・ワースト』のリーダーを務めてる」

『ロイヤル・ワースト』は孤児の集まりでもある——そこに、両親有りの子供が紛れ込んでいるのも変な話だが、これだけ強いなら納得できる。

「……僕はエワテオ。苗字は名乗りたくない」

「別に名乗れって言ってないんだけどね……だって、さ……今から殺す人間の名前を覚えたって仕方無いじゃん!!」

意識が吹っ飛びかける。

シャリサが叫ぶと同時に、エワテオの体は宙に舞っていた。

続けて赤色の砲撃が飛び、叫び声すら上げる間も無くエワテオは吹き飛ばされていく。

電波変換している状態だった為、辛うじてウェーブロードを掴む事で威力を分散させていく。

だが、痛みは引かない——そこへ、シャリサが飛び込んだ。

蛇のような形をした電波の塊の応用なのか、その手には不安定な棒状の何かが握られている。

それを振るうと同時に、エワテオの体を激痛が襲った。

続けざまに吹き飛ばされ、地面に落下する直前で体勢を保つ。だが、現実は甘くない。

シャリサが周囲を圧倒させた、あの蛇状の電波を掲げていた。

「さよならだね」

何も言えなかった。

まさかここまで実力が違うとは、思ってもみなかった。
今度は激痛すら無い。

ただ、頭の中が真っ白になりかけ、何メートルも吹き飛ばされていく。

「あゝらら。こりゃ、飛んでる最中に激痛が襲ってきてショック死だろうね。まあいいや。とにかく――なっ!？」

シャリサが叫んだ先には、巨大な砲撃口があった。
どこに設置されている訳でもない、砲撃口だけが空中に浮いているのだ。

『アレクサンダー』……確か、そんな名称だったはずだ。

「くそっ！ アップリクから助けを求められて、スカイウェーブ管理所が明け渡したのか!？」――

砲撃口が近くにある為、このまま高压電波が放たれれば間違いなく、シャリサ達は死亡する。

だが、シャリサは蛇状の電波を作り出す。

大きさ、大気圏に触れる程度――。

通常なら、これを作り上げたシャリサ自身が電波の質量に耐え切れず、押しつぶされているはずだ。

だが、先程シャリサが言っていた『異次元』の力を引き出す道具のおかげで、押しつぶされずに済んでいるようだ。

「絶対にアツフリク政府だけは潰す！！」

『アレクサnder』が放たれると同時に、蛇状の電波が振るわれる。アツフリク政府にまでその攻撃は及び、アツフリク政府本部の建物は即座にバリアを張る事で攻撃を防御。

しかし、その攻撃はバリアの中にも及び、数名が犠牲となるが、それだけに被害は留まる。

辛うじて生き残っているシステムもあるが、サテラポリスは完全に壊滅。

出撃準備をしていた『ランドバリア』は咄嗟に全メンバーを合わせた出力のバリアを張るが、数十名が死亡。

守る術すら存在しなかった国民達は、約十人が救助隊五人と共に死亡した。

シャリサは死亡する瞬間を見ていない為、殺人したという自覚が無い。

仲間達は全員、『アレクサnder』の攻撃で死んでしまった。

だが、補充はいくらでも出来る。

そう思いながら、シャリサは通信機を耳に当てる。

「終わった。アツフリクは、もはや壊滅状態だよ」

何だ、これは？

誰も守れなかったではないか。

自分の才能が誰かの役に立つ、などと豪語していたくせに、誰も守れなかった。

『ランドバリア』の仲間も、何人死んだか分からない。

自分は吹き飛ばされ、瓦礫の中に埋まってしまっている——痛みしかない。

痛み、痛み、痛み……体の五感が全て、痛みに支配されてしまった世界。

そんな中、瓦礫の向こう側から声が響く。

「俺はニホン政府の者だ。お前を、こちら側の『闇』へと招待する」

「っ？……」

「お前の仲間は半分死んだが、それでもまだ生きている者はいる。

だが、いつ殺されるか分からんぞ。奴らの追撃がいつ来るかも分からないし、アフリクが弱ったのをいい事に、他の者が攻めてくる可能性がある。だが、それは簡単な行為で回避される」

「お前が俺達の要求を呑んでくれればいい。そうすれば、俺たちニホンがアフリクへの攻撃を全力で阻止する」

「交渉、条件、は？」

「先程言っただろう。『闇』に招待する」

「組織、名は、あるん、ですか、ね？」

「『ダークネス闇負陣』だ」

エワテオは弱く笑う。

自分への嘲りだった。

こんな事でしか仲間を守れないのか。

唯一の居場所を、捨てなければならぬのか。

結局、何も出来なかった。

だが……仲間達を死なせる訳にはいかない。

「入らせ、て、もら、う……」

「交渉成立だな」

仲間の平穏を守るため……悪魔の契約を交わし、エワテオは更なる闇へと堕ちていく。

ボリス・ミツシヨ

『サテラポリス』の一日は忙しい。

矢継ぎ早に任務が飛び込んでくるし、高ランクの隊員にはそれなりに難しい任務が課される。

そんな訳で、暁シキとジェスターはサテラポリス隊長から緊急呼び出しを食らい、ドタドタと騒がしく走っている訳だ。

「隊長、の、ヤツ！ 人、が！ ウィルス、退治、を、したばかりで、疲れて、いるってのに！！」

走っているせいか、シキの言葉は途切れ途切れである。

ジェスターはシキに冷ややかな視線を送りながら、一言告げただけである。

「黙って走れ」

アッフリク人というのは、穏かな気質だったハズではないのか。

温和な性格の持ち主ではなかったのか。

シキは隣で走るアッフリク人——アメロツパ人の可能性はあるのだが、国籍上ではアッフリク人になっている——に対し、溜息を付く。

いつの間にやらジェスターがパスコードを通し、銀色の扉を開けていた。

銀色の扉の先に広がるのは、『隊長室』。

『サテラポリス』ニホン本部内では最高セキュリティを誇り、尚且つ、重大なデータが収められている場所だ。

円形状の机が一つなのに対し、椅子も一つ。

巨大なモニターが左右の壁に二個掛けられている。
金掛けすぎだろ、と内心突っ込むシキであった。

巨大な椅子に座する隊長は二人を見ると、左目を静かに開いた。
右目は閉じられたまま——どうやら、隊長も疲れているようだ。

「……ああ、君達か。 さて、今回は重大な任務に就いてもらおう
と思っているぞ——ウィルス退治で疲れている？ 戯言は聞いてい
ない」

シキの気持ちを読み取ったのか、隊長は冷ややかな口調で告げた。
怒りのあまり、わなわなと拳を振るわせるシキに対し、隊長は何も
告げない。

ジェスターはシキの手を叩き、『失礼だ』、と一言呟いただけであ
った。

「今回の任務だが——先程、君達はウィルスを退治しただろう？
えーっと……何体だったかな？」

「……五八〇〇体です」

とんでもない数を告げるジェスターだが、それに対しては何も言わ
ない隊員達であった。

「……そうだったな。 で、そのウィルス全てに共通する点が、「
気性の荒さ」、「異常なコンビネーション」、「原因不明の暴走」
…… 人為的な暴走である事は間違いないだろう。 君達が戦ってい
る間、ウィルスデータからコードを逆算していたんだが…… 結果、
一つの建物が浮上した」

隊長は面倒そうにハンターを操作する。
壁に掛けられていたモニターが浮遊し、隊長の背後に移動した。

モニターに映されたのは、一つの建物。

「……『国立情報管理所』……」

シキの言葉の裏には、驚愕が秘められていた。

『国立情報管理所』——国家の秘密情報を一手に保管しておく場所であり、危険な科学物質なども保管されている。

第一、『国立情報管理所』は強固なガードで守られているハズだ。

「……『国立情報管理所』が、何者かの手によって落ちた。いや……外部者の手によって、ではない。私も詳しい事は知らんのだが……『国立情報管理所』を守る、ニホン国家直属の裏組織、『ダイレクト』が反乱を起こしたらいいんだ。『国立情報管理所』を守るのだから、『国立情報管理所』に反乱を起こしても不思議では無いな。ニホン国家は『ダイレクト』よりも規模は小さいが、かなりの戦力を誇る裏組織、『フォーム』を『国立情報管理所』に派遣するらしい。しかし、彼らが到着するよりも早くに『国立情報管理所』が潰れる可能性もあるから、私達も出勤しなくてはならない」

「……『ダイレクト』は、『国立情報管理所』を利用してウィルスを暴走させる事によって、何らかの目的を果たそうとしていた、って事なのか？」

「そうだろうな……。今回は、君達を含めた『エース』を五人派

遣する。生憎、他の隊員は任務に出てしまっているのね。さあ、事態は深刻だぞ——早く出勤してくれ」

『国家的秘密組織』、『フォーム』の一員、小倉^{おくら}リムは溜息を付いた。

『フォーム』は二ホン国家の情報漏れを防ぐ、情報関連の暴動を鎮める為の組織なので、今回の騒動も彼女らに回されてきた。

だからこそ、リムは溜息を付いてしまう。

雑魚達の相手をしなければならぬ事が、心底ムカつく。

ちなみに、『フォーム』はリムを含めた六人で構成される。
今回の任務は、小倉リム、菜沙^{なさ}ミイ、波句^{はく}トイの三人が受け持つ。

彼女らは二ホン国家の使いが運転する高速カーに乗車しており、各々が勝手な行動を取っている。

トイはウェーブカードのデータ整理を、ミイはそこら辺のショッピングシティで購入したデザートを頬張っている。

リムはというと、『フォーム』のリーダーとして作戦を頭の中で練っていた。

「（……そういえば、最近『ダークネス』の連中が人員を掻き集めているんだっけ？……物騒な事始めないといいんだけどね、コッチもメンドーだし）」

作戦を練りながらもこういった事を考えられるのは、やはりリーダーとしての素質を持っているからだろう。

ちなみに、彼女は中学二年生——十四歳である。

トイは高校二年——十七歳。

ミイは小学六年——十二歳。

バラバラな年齢であった。

暁シキとジェスターの二人は、『サテラポリス』専用の高度空中浮遊力ーを使って『国立情報管理所』へ到着していた。

『国立情報管理所』の周囲には侵入者排除の為に電流が流れていたはずなのだが、内部からの操作で電流は消えていた。

セキュリティすら無くなった『国立情報管理所』のゲートを潜り、内部へと侵入する。

どうやら、『国立情報管理所』制圧者は自動防衛ウィザードと交戦を繰り返しているようだ。

煙がもくもくと立ち込め、始終爆発音が響いている。

「……あつはつは、携帯用うまい玉、たこ焼き味を食べば戦闘力アップ——」

直後、シキの脳天へ拳が叩き込まれた。

絶叫と共に、シキがうずくまる。

拳を叩き込んだジェスター本人は、こめかみを奇妙に震わせていた。

「……真面目に仕事しろ」

『ダイレクト』の一員、キューゼニーは銃を握り締めた。
ちなみに、キューゼニーというのはコードネームだ。

彼が握り締める銃は、そこら辺にある安っぽい物ではない。
電波を銃口に圧縮し、狙いを定める事によって対象物を粉々に吹き飛ばす。

仕組みとしては、銃口に留まった電波を射出する瞬間に特殊なリアルウェーブ——電波人間、ウィザードへ壊滅的なダメージを与える弾丸——へと変換し、放出するのだ。

最新鋭のウィザードが銃弾に当たり、消滅していく。

彼は溜息を付いた。

今回の作戦は、『ある情報』を国家から聞く為の物。

『国家情報管理所』に存在する危険化学物質を爆破し、都市部へ被害を与える——という脅し文句を二ホンへと渡している。

『ある情報』、というのは『ブラザーネットワーク計画』に関してだ。

『ダイレクト』の上の連中が何を考えたかは知らないが、キューゼー達下っ端はそれを聞きだす為に攻撃を繰り返している。

ちなみに、キューゼー達とは違う、電波変換可能な人物もこの作戦に加わっていた。

その為、派手な光線やら何やらが飛ぶ事もある。

と、そこでキューゼーは異変に気付いた。

ウィザードがない。

おかしい。

ウィザード達はまだまだ残っているハズだ。

『国家情報管理所』を防衛する自分達だからこそ分かる。

それに、何で仲間達の悲鳴が通信機越しに聞こえてくる？

直後、キューゼーの背後で轟音が鳴った。

振り向けなかった。

振り向いたら最後、終わってしまうような気がしてならない。

「ハア―イ。聞こえてるかな？『フォーム』って言えば分かるでしょ？」

キューゼーは、初めて『死』という物を覚悟した。

建物の中へと足を進めたクリア・エースと、リセット・ジョーカーも、異変を覚えていた。
明らかに様子がおかしい。
先程まで響いていた爆発音も、金属音も、何も聞こえない。

そして、二人が何よりも戦慄したのは、床に転がる無機質なアーマ

ー達だった。

「……どういう、事だよ……コレ……」

クリア・エース達は知らない。

アーマーに包まれて転がっている死体が、『ダイレクト』の隊員だという事を。

『国家情報管理所』に従業員など居るハズもないのに、そういった無力な人間だと勘違いしてしまった。

そして、クリア・エースが次に捉えたのは三人の少女。

全員が返り血を浴びた電波人間で、尚且つソードなどといったカードを手に入れている。

これだけの事があれば、勘違いというのは容易に引き起こされる。そう、二人は少女達を『ダイレクト』のメンバーだと勘違いしたのだ。

「ふざ、けんなよ……無力な人間を殺しやがって……」

「……シキ、手加減は無しだ。全力でいくぞ」

『……全てをリセットした上で任務を果たす、と……面白い』

シキ、ジェスター、リセットのやり取りが終わると同時、交戦が開

始した。

ただし、サテラポリスの二隊員が一方的に挑んだ戦いである。

「……『サテラポリス』の隊員、か……何で戦おうとしているかは分からないけどさ……リーダー、戦闘命令出しなよ——物足りなかったしさ」

ミイの言葉に対し、リムは手短に答えただけだった。
それは死刑宣告であった。

「……ミイと私が出るから、トイは待機しておく事」

クリア・エースの目が、驚愕に見開かれる。
リムのバスターから放たれたのは、単なる電波のレーザーだ。

たったそれだけ——威力は低いはずなので、突っ切ろうとしたクリア・エースの腹部が、盛大に切り裂かれた。

電波人間のおかげで、粒子が飛び散る程度で済んでいるが——ただのバスターレーザーがここまでの威力を叩き出せるハズが無い。

「デストロイ・ギガント・ミサイル!!」

デストロイミサイル——いや、リセット・ジョーカー自身の電波とサテラポリスの補助を受け、形すら変わってしまったミサイルは、デストロイミサイルとは呼べない。

爆発的な威力を叩き出し、リムへとミサイルが突っ込む。

「……あらら？ 何だ、この程度？」

異常だった。

何もかもが、異常だった。

爆風の中から、アーマーに包まれた少女が現れる。

「……その様子だと、経験こそあるものの、壮絶なる戦場は体験してないみたいだね。サテラポリスといえど、そんな過酷な環境には身を置いていないのか……。まあ、いいや。空っぽの頭の中に入れておくといい——この姿の名前は、エクター・バレント。

『フォーム』のリーダー、と言えば分かるでしょ？ じゃ、寝転がってるといいよ。その内、仲間が迎えに来るでしょ」

『フォーム』、という言葉聞いて、クリア・エースの表情が歪む。

「（……こんな、やり方……ニホンは、認めてる、の、かよ……）」
彼は、『国家的秘密組織』など知らない。
ニホンの『裏』も知らない。
それでも、そういった物に対して疑問を抱く事は出来る。

クリア・エースの心はただ一つ、「疑問」だ。

「結局、あたしの出番無かったし……」
「敵のひ弱さに嘆くんだね、戦闘狂」

そう答えたリムのハンターへ、着信が入る。
面倒そうに受信ボタンを押し、ディスプレイを表示させた。
ディスプレイには誰も映っておらず、真っ黒な空間が映し出されて
いる。

『裏』からの命令だ。

『……ご苦労だった。』 『国家情報管理所』の後始末はコチラで行
っておくよ。 では、君達には新たな戦場である『国立ターミナ

ル』へと向かってもらおうか。 テロリスト達が、そこから情報を盗み出そうとしているらしい』

「そうですか、‘総理大臣’さん」

それだけ返事すると、リムは通信を切断した。

それと同時に、どこに居るかも分からない残りのメンバーへ連絡を入れる。

『フォーム』は、常に裏の裏——闇の底で、与えられた任務をこなしていた。

キャラクター・ドリーム・マッチ 0

【キャラクター・ドリーム・マッチについて】

『キャラクター・ドリーム・マッチ』とは、前作キャラ、今作キャラ、原作キャラの中から、選ばれたキャラクターが出場し、普段なら有り得ない組で戦おうぜ！ イエーーーーーイ！！ といった、作者の気まぐれである！！

ちなみに、誰と誰が戦うかは、皆さんに募集中なのです！！

・設定

『ワールドリープ』と呼ばれる装置を使って、ギャラクシーがキャラクターを掻き集めた設定にしています。

ちなみに、『ワールドリープ』は今後、本編に登場するので要チェック！

・ルール

基本は何でもオッケー！

ぶっ飛ばせ！ 引きちぎれ！ 地球吹っ飛ばせ！ と、何でもアリ！！

キャラクター・ドリーム・マッチ 1

『ワールドリーグ』によって、様々な時代の者が掻き集められた――詳しい説明は省く、何せ、何事も都合の良いように進むのがこの『キャラクター・ドリーム・バトル』だからだ。

「……ギャラクシー、何なんだい？ これは」

問うのは流星スバル。

懐かしき、五十年前のスバルだ。

その身に『デスドライ』を宿し、『流星一族』の血を引く英雄なのである。

ただし、彼は己の秘密と、その冷酷さについて知らない。

『ふむ。 君たちに、色々と争ってもらおうかと思ってね』

「……どこまで人を争わせれば気が済むんだ……外道め。 ハツキリ言つて、今ここで殺してやつても良いんだぞ」

哀れなスバルである。

ギャラクシーに攻撃が当たるハズなどない。

それを知ってか知らずか、電波変換の体制を作る。

脅しているつもりなのだろうが、ギャラクシーにとっては屁でもない。

『いやいや、今回は君に観戦してもうと……ね』
「は？」

思わず素っ頓狂な声を上げるスバル。

それに対し、ギャラクシーは両腕を広げて見せた。

『ズバリ、！』『キャラクター・ドリーム・バトル』だ！！様々な時代から人々を寄せ集め、戦わせようという物だ！私にしては珍しく、物騒な物ではないだろう？』

私にしては珍しく、と言っている時点で胡散臭いのである。

何せ、嘘と偽りの塊であるような男こそが、ギャラクシーなのだから。

『お前の時代よりも、五十年先の人物の戦いを見れるのだぞ？』

これには興味を持ったのか、スバルの体が警戒を解く。

力が込められていた肩は下がり、表情も幾分か穏かになった。

『興味を持つてもらえたようで、何よりだ。さあ、見たまえ。世紀の大決戦が始まるぞ。』『バイオレンス』のリーダー、デッドこと星光アルタイルの入場である』

何とも悪ノリなギャラクシーだ。

スバルは訝しげな表情を作るが、すぐさまそれは驚愕へと変わった。

スバル達のいる部屋——そこにある窓に掛かっていたカーテンが、一斉に開いたのだ。

窓は三百六十度、全方位に展開されており、窓から覗き込めば、下にはウェーブロードで作られた広場が見える。

感嘆の声を上げるスバルに、ギャラクシーは早口で説明した。

『この窓は三百六十度に展開されており、死角は無し。オマケに拡大なんかも一手に引き受けるので、戦況を詳しく見れるぞ。ホラ、アルタイルの入場だ』

ギャラクシーの言葉に従ってみれば、確かにそこにいた。片目を覆う黒髪、マント、背丈——どこからどう見ても、アルタイルだった。

「えっ——死んでない……だとッ!？」

『ハッハッハ! これは作者の都合の良いように作られた番外編だ! 何が起こつても不思議ではない!』

「なっ、なんだってー!？」

『驚いている暇は無いぞ、オベラの入場だ』

続けざまに飛んだ声に、スバルは窓の下を覗き込む。見れば、金髪の少年が立っていた。

「……んで、俺とお前は戦わねばならぬと」

『……頭上から聞こえてきた声から分析するに、恐らくはそうだろう』

お互いにお互いの事を知らず、それでも彼らは会話する。
というよりも、この状況では話し相手がそれしかないのだ。

『……早く終わらせて、帰ってしまおうとしよう。 電波変換！』
「……、んじゃ……ミハイル！ 行くぞ！！」

『……あー……了解した』

派手なポーズを決める二人。
流星スバルと同じく、変身は格好良く行いたいようだ。

「トランスコード！ ミカエル！！」
『……、メシアブレード』

電波変換を終えたばかりのミカエルへと、黄金の刃が飛ぶ。
細い刃の周囲に更に小さな刃が付属しており、衝突すればただならぬ事態となる。

しかし、電波人間の戦いに対し、その常識は通用しない。

轟！！ と、ミカエルの周囲三メートルを強力な風が包む。
メシアブレードが弾かれ、訳も分からない方向へと消え去った。

それを見たデッドはすぐさま、腕へ電波を溜める。

『ゴッド・バイオレンス！！』

二人が立っている巨大なウェーブロードが幾らか削られ、赤紫色の衝撃波がミカエルへと迫る。

ミカエルはそれを見ると同時に、軽く腕を振り上げた。

「ウェーブコントロール！」

衝撃波が不自然な動きを見せ、上空へと消え去る。

デッドは黒い剣を構え、ミカエルの懐へと飛び込んだ。それを察知したミカエルだが、時既に遅し。

金色のアーマーが削られ、膨大な量の粒子が飛ぶ。

ミカエルのバイザーはエラーを訴えており、デッドの攻撃力の高さを表わしていた。

続けざまに、デッドが電波を練り、弾丸として射出する。

無防備となったミカエルの腹部へ、弾丸が直撃した。

「おう、があああああああッ！？ く、そ！……『神力』
！！」

『異次元』の力が、高濃度圧縮される。

弾丸となつて飛んだ力の塊は、デッドへと一直線に向かった。

それを見たデッドは、空気中の電波を使って防壁を築き上げる。

『神力』と防壁が、衝突した。

当然ながら、ミカエルとは違って戦闘のプロであるデッドは、相手の動向を待たない。

ミカエルの背後へと転移すると、そのまま剣を振り上げた。

決着は付いた。

『バイオレンス』のリーダーが振るった剣により、ミカエルは倒れる。

ミカエルは理解不能、かつ絶大な威力を誇る攻撃を放てるが、弱点が多い。

オマケに、戦闘慣れしていない。

対するデッドは、幼い頃から戦争を経験している為、戦闘経験が豊富。

単純な技術勝負だった為、デッドが勝利。

ミカエルがデッドに指一本でも触っていれば、デッドは負けていたであろう。

キャラクター・ドリーム・マッチ 2

次に闘技場に現れたのはミソラとアリサだった。

現れた、といよりも転移したという方が正しいかもしれない。

突如として出現した白色と桃色の球体の中から、突然二人が現れたのだから。

『早速だが、二人には戦ってもらうぞ。 どちらかが敗北すれば、帰還させてやろう！』

『ライトポリス』の任務中だったアリサは当然、買い物中だったミソラも、帰る為に全力を尽くす。

アリサはクエイトと、ミソラはハーブと電波変換し、ライト・ジェネシスとハーブ・ノートが睨み合う。

先に動いたのは、ハーブ・ノートだった。

水色のギターに指を乗せ、一気に弾く。

「ショック・ノート!!」

ハーブ・ノートの技の中では、「ザコ」といってもいい程に威力の低い技だ。

様子見、という事だろう。

「カッターソード!!」

細い刃が震動し、音符が切断される。

それを見たハーブ・ノートは、地面を蹴って前に出た。

「オンプー!!」

口を大きく開け、歌声を響かせる。

音符が凄まじい速度で飛び、ジェットのように唸った。

対するライト・ジェネシスは左に身を振り、音符を蹴り上げる。

勢いを付けた音符が飛び、攻撃した本人であるハーブ・ノートの腹部に直撃した。

二、三回程、赤色のボディをウェーブロードにぶつけ、転がっていく。

「痛つつ……」

『ミソラ、手加減は無しよ!!』

「——ソング・モード!!」

数回ギターが轟音を轟かせ、ハーブ・ノートの足場に、ピンク色のオーラが張られる。

オーラ、というよりもエネルギーが漏れ出しているような感覚だ。

「はぁッ!!」

ガギャアッ!! と、ギターが壊れたような音を出す。

無数の音符が、ライト・ジェネシスへと降り注いだ。

両腕を頭の上に持っていく、ガードの体制を取ろうとするライト・ジェネシス。

しかし、これだけの数に対し、腕だけで対処できるハズが無い。

「うあああああああああ!？」

無残にも、ライト・ジェネシスの体が吹き飛んだ。
三メートル程飛んだ所で、ウェーブロードに衝突する。

「くっ、あっ——光電波を使うしか、無い……!　スターショック
!！」

ライト・ジェネシスが左腕を振り、そこから黄金色の衝撃波が発生する。

衝撃波は津波のようにハープ・ノートへと迫った。

「スバル君の使ってる電波と、感覚が似てる!？」

『ミソラ!　集中して!！』

ハープの言葉によって我に返ったハープ・ノートは、ギターの先端を力一杯握り締める。

そこから音が漏れ出すが、彼女は気にしない。

「ソング・セカンド!！」

ピンク色のオーラが、ハープ・ノートの全身を包む。
そこから全方位に音符が射出され、波を打ち消した。

「スバル君と似ているとはいえ、そこまで威力は高くないみたいだね——なら、行ける!！」

ハープ・ノートを包んでいたオーラが、濃度を増す。
淡いピンク色から、濃いピンク色へと変わった。

「ソング・メロディー!!!」

声と同時に、オーラが一気に膨張する。

そこから音符が連続射出された。

射出された音符は途中で姿を変え、一箇所に集まる。

ペガサスのような姿を象り、咆哮した。

「音神、イドウン!!!」

母親から受けついた技を操作し、ライト・ジェネシスに直撃させる。
結果は単純だった。

ガン!!! と、抵抗すら許さず、イドウンがライト・ジェネシスを
吹き飛ばす。

コレが勝敗の決め手となった。

ライト・ジェネシスは一撃必殺を持ち合わせておらず、火力の高い
技が存在しない。

対するハープ・ノートは様々な強化を施されている為、圧倒的な攻
撃を繰り出せるのだ。

——序章——第二の物語が、ここに幕を上げた——

『主な人物』

「エイト」(ベガ)

「マッド」

「タブ」

『ストーリーガイド』

——「時は二二五?年——」

流星スバルの時代から約五〇年。
熾烈を極めた『ザ・ファイブ・ワールド・ウェーブバトル』は既に
終戦していた。

悪の科学者、ドリームによって開発された擬似単独電波変換が可能な『ウェーブマン』。

彼らは『ザ・ファイブ・ワールド・ウェーブバトル』の首謀者、ギヤラクシーと内密な関係にあったドリームによって開発された為、世間からは迫害されていた。

『ウェーブマン』を世間の為に使い、世間からの迫害を避ける為に使用されたのが『ゼロラグナ』。

『ウェーブマン』を集中管理する場所である。

——「力が欲しくは無いのか？」

とある研究所。

そこでは、非人道的な実験が行われていた。

成長型ウィザードと呼ばれる、人間と同じように成長するウィザードを実験動物のように扱っていたのだ。その時代では成長型ウィザードは実現が難しく、数々の科学者達に取り掛かっても不可能とされていた技術だったのだ。

そんな成長型ウィザードが存在する理由はただ一つ、悪の科学者ドリームが作り上げたからだ。

どうやら、ドリームは成長型ウィザードを作ったのはいいものの、興味を示せなかったらしい。

ウィザードはコールドスリープ状態に陥り、四〇年の月日を経てから目覚めてみれば、そこは研究所だった。

十年にも渡る培養液の中での生活。

心理的な面で、実験動物になってしまったウィザードは行動を起こせなかった。

そんな彼の頭に響いた声。

それこそが、成長型ウィザード——マッドに、人類への復讐を決意させる物だった。

——「一番手は、誰にするかな？」

ひたすら黒く、闇に支配された空間。

どことも知れない場所に、彼らは集まっていた。

ギャラクシーの配下かつ、テロッドという少年の部下である者達だ。話し合いの結果、テロッドは情報解析に優れたタブという少女を、

『ベガ抹殺』に指定する。

——「ラグナコードアクセス!!」

『ゼロラグナ』による命で『星流小学校』に潜入していたコードナンバー008、エイト。

彼は憂鬱な気分と溜息というお供を連れて、帰路に付いていた。そんな彼の前に現れたのは、服装を所々焦がした中年の男性であった。

彼の言葉によれば、自宅が何者かによつて燃やされたらしい。

男性を放っておく事も出来ず、仕方なく男性の自宅へと向かったエイト。

彼がそこで見たものは、『グレイブ』という怪しげな集団だった。

——「偽名であるベガと呼んだ方がいいかな？」

『グレイブ』によつて危機的状況に陥ったエイトを助けたのは、緑髪の少女だった。

彼女は自らをタブと名乗り、エイトのコードネームと偽名であるベガを言い当てる。『ゼロラグナ』の掟に従い、タブを倒す為に『ゼロラグナ』のサーバーへアクセスするエイト。

それを見たタブは自らも電波変換し、戦闘体勢へと入った。

——「これが「覚醒」って現象か……」

ブレインとなつたタブを相手に、エイトは『ゼロラグナ』の戦法を用いて戦う。

コチラの行動を先読みし、的確に分析を行うブレインを相手に苦戦するエイトだったが、彼の行動に変化が訪れる。

ブレインもそれを感じ取るが、解析能力が追いつかない。

結果として、エイトに電流を流し込まれ、ブレインは敗北する。

尚も立ち上がろうとするブレインの前に現れたのは、ギャラクシーの部下、ノートだった。

彼はブレインに撤退命令を出し、「オーバーコールド」によってエイトを倒す。

——「甘えは無用だ」

ノートの攻撃によつて気絶したエイトは、『ゼロラグナ』の隊員に回収された。

彼が運び込まれたのは、『ゼロラグナ』の病室だった。

目を覚ました彼が最初に見たのは、コードナンバー002、セカンドである。

セカンドは『ゼロラグナ』の中でも屈指の実力を誇る『五体』の一人であり、尚且つ幹部であつた。

彼は呻くエイトに対して厳しい現実を突き付けると、その場を去ってしまう。

未来技術のおかげで三〇分程度で退院したエイトは、コードナンバー

1005、ファイブの帰還を知らされる。

Aランクの実力を誇る人物を一目見ようと、エイトは群集の中に混ざる。

そして、ファイブが放ったのは意外な一言だった。

——「コードナンバー008、用がある」

ファイブに連れて来られた先は、『ゼロラグナ』のマップデータにも載っていない『秘密の場所』だった。

そこで、エイトはファイブの過去を知る事となる。

ファイブがエイトに共感を覚えたのと同様、エイトもファイブに不思議な感覚を覚えた。

「偽りの名前であるコードネームで呼び合うのは嫌だから」、という理由で、エイトとファイブは互いにベガ、ルシファーと呼ぶ合うようになる。

——「圧倒的な实力を見せ付けて、勝ってやる」

少年、テロッドに次なる資格として命ぜられたコール。

彼はドリームの実験により、キャノン系統のカードを自在に操る「サテライトキャノン」といった能力を所持していた。

彼はエイトを誘き寄せる為、破壊を開始。

『ゼロラグナ』のボスはコールの暴動がエイトを呼び寄せる物だと

判断し、エイトに出撃を要請。

現場に駆けつけたエイトに対し、コールは宙に浮遊したキャノンで砲撃を開始。

対するエイトは、レッドランスで応じる。

だが、実力差があまりにも大きかったせいか、エイトは敗北する。コールはエイトにトドメを刺そうとするのだが、そこに割り込む人物があった。

ギャラクシーとの戦いで死亡したハズの、流星スバルだ。

——「やれるものならやってみろ。サテラポリスめ」

リキッド「K「克蘭。

彼は、かの有名なキングの息子だった。

父親であるキングに『バイレオンス』に売り飛ばされ、ドリームの実験動物となってしまうた少年である。

コールドスリープから目覚め、五〇年もの月日が流れた世界で、彼は「単独ウェーブマン」としてサテラポリスから逃げ回っていた。ウェーブマンは『ゼロラグナ』に所属しないといけない為、『ゼロラグナ』に所属していない、いわゆる「単独ウェーブマン」は違法となってしまうのだ。

そんな「単独ウェーブマン」であるリキッドを追いかけるのは、二人のサテラポリス隊員である。

一人は暁シキ、もう一人はジェスターである。
シキの方は暁シドウの孫だ。

シキはアシッドを基とし、更なるスペック向上を果たしたウィザード、クリアを所持。

ジェスターの方はジョーカーを小型化し、スペック向上を果たしたウィザード、リセットを所持。

対するリキッドは、「紋章」系カードを用いた「ノイズドトランス」で抵抗する。

一方、エイトの方は『ゼロラグナ』に帰還。

そんな時、エイトのハンターが着信を告げた。

書かれていた内容は、「サテラポリスが襲撃を受けたので、今から迎撃に向かえ」といった物だった。

サテラポリスをたった一人で制圧する人物なのだから、Sランク相当の実力を誇っているハズなのだ。

低ランク者を使い捨てにしてもサテラポリスを守る、といったように聞こえるかもしれないが、真実はそうではない。

高ランク者を死なせては『ゼロラグナ』も不利益を被る為、死んでも構わない低ランク者を向かわせている——エイトはそう考えたのだが、真実はそうではなかった。

そう、『ゼロラグナ』のボスがエイトを『成長』させる為に用意した、『訓練』のような物だったのだ。

——『人類……いや、地球自体を許しはしない!』

まずは二ホンを落とす為、サテラポリスへと侵攻したマッド。刃向かう者全てを蹂躪し、圧倒的な実力差を見せ付ける彼は、『訓練所』に搭載された制御システムを落とす為、『訓練所』のセキュリティを破壊してみせる。

低ランク者の『ゼロラグナ』が駆けつけるが、サテラポリスの隊員にやったのと同じように蹴散らしてみせた。

圧倒的な絶望が広がる中、『訓練所』にエイトが現れる。

——「凸凹トリオ結成」

孤独にマッドへ挑もうとするエイトの背後に、二人の少年が現れた。片方はコードナンバー004、もう一人は過去に演習試合でエイトと交戦し、コードネームを漏らしてしまったコードネンバー003、サイドである。

彼ら三人は凸凹トリオを結成し、マッドへ挑もうとするのだが、結果は撃沈。

一瞬でエイト以外の二人が蹴散らされた。

しかし、エイトは気付いていなかった。

コードナンバー004はともかく、コードナンバー003の撃沈が

演技だという事に――。

リキッド・クラウンはエースとジョーカーのタッグを打ち破り、マッドの襲撃によって防御が手薄になったサテラポリス内へと侵入していた。

「単独ウェーブマン」故に、ホームレスのような生活をしている彼は、金目の物を奪おうと考えたのだ。そんな彼は目撃する。

カプセルの中に浮遊する、赤黒い球体を。

結果として、リキッドは赤黒い球体イコール金目の物と判断し、盗難した。

――「……存在を消去……己に取り込む」

急遽参戦したシキとジェスターの助けなどはあったものの、依然としてマッドの優勢は変わらなかった。

大見得切って『スーパヒーロータッグ！』等といったシキだったが、ジェスターもろとも撃沈する。いっその事死んでしまおう、と決めるエイトだったが、マッドの攻撃を見て認識を改める。

これまで「生きる」事に興味を示さなかったエイトだが、目の前に差し迫る危機を認識した瞬間、遂に生存に目覚めた。

生き残る、たったそれだけの為に、強大な存在であるマッドへと挑

む。

電波を膨張させる事で爆発を引き起こすボルカニックなどの戦法で傷付いたエイトだが、彼に変化が訪れる。

彼の口調がガラツと変わり、マッドをも圧倒する怒涛の攻撃が炸裂した。

——『勝者が正義だ』

エイトに敗北したマッドは、自分が敗北者であり、『悪』だという事を認める。

そこに見えるのは、「勝者が正義」というこの世の悲しい本質だった。

マッドは自分と同じような外れ者のウィザードを掻き集め、保護すると決意した。

戦いが終わった次の瞬間、奇妙な声と共にエイトの内部へ黄金色の球体が入っていった。

『ゼログナ』に帰還したエイトは、驚愕の事実を告げられる。

たった一人でSランクの敵を撃破した少年、と認識され、オマケに幹部候補となったのだ。

これが始まりだった。
熾烈を極めた戦いの、
始まりだった。

『主な人物』

「ベガ」（エイト）

「ザクス」

「カオス」

『ストーリーガイド』

——『私が、ゼロラグナ最高責任者であり、リーダーです』

ルシファーに連れて行かれた先で、『ゼロラグナ』最高権威者、ボスと出会う。

幹部候補になった事を告げられ、ベガは驚愕する。

ボスの配慮なのかどうかは分からないが、諸事情あってベガとルシファーは『ゼロラグナ』内でも内密に会話する事が可能になった。

一旦は解散したエイトのハンターに、命令が届く。

暴走とは違い、活性化したウィザードを鎮圧して来い、といった旨の内容だった。

Gランク任務——なハズなのだが、ウィザードの数が五〇〇を超えている。

常識外れ、かつ無茶苦茶な任務内容に溜息を付くベガだが、逆らう訳にもいかない。

——『世界を支配する』

数百体ものウィザードが潜む、誰も使わなくなった廃墟。

そこで、金髪の少年が縛られていた。

歳は八〜九程だ。

どうやら、ウィザード達はこの人質を交渉術としてサテラポリスを降伏させ、世界を支配するつもりでいるらしい。

サテラポリスを降伏させただけで世界を支配できる、という安易な考えが暴走ウィザードらしい物であった。

——「面倒臭いな……はあ」

ウィザードに襲われたという街に到着したベガは、思わず溜息を漏

らした。

ウェーブロード上には見張り番のウィザードが何体もあり、下手すると襲われかねない。

見張り番がいるイコール拠点がある、と判断したベガはそれらしき場所を搜索。

手始めに路地裏を当たったのだが、手がかりは無し。

最終的に、廃墟へと向かった。

『数百の銃がお前を狙っているぜ』

廃墟の中へ踏み込んだベガは、金属音が一齐に鳴ったのを捉える。ベガが視線を巡らせた所、スポットライトに照らされ、ウィザードにソードを突き付けられている少年がいた。

それを見て、ベガは自分が『ゼロラグナ』の幹部候補だと主張。ウィザード達を掻き乱し、何とかしようと思ったのだが――逆効果となってしまうた。

ベガの言葉によって追い詰められたウィザード達は滅茶苦茶に破壊行動を行い、ベガの殺害を最重要項目とする。

生存本能に突き動かされたベガは街へと逃げ、五〇〇体ものウィザードに追いかけられるハメとなった。

――「命の恩人に対して、そんな態度を取るつもりか」

ベガがウィザードから逃亡している最中、ウィザード達が次々と悲鳴を上げて倒れ込んだ。

呆然とするベガを、路地裏に居た何者かが掴む。

そのまま路地裏へと引つ張られ、ベガは顔色の悪い男性と出会った。

男性はザクスと名乗り、ベガはコードネームであるエイトではなく、クリエイトネーム偽名であるベガを名乗る。

どうやら、先程のウィザード達の悲鳴はザクスの攻撃による物だったらしいのだ。

殺める事を極端に嫌うベガは、ウィザードをデリートしたのかどうかをザクスに問う。

ザクスの答えは、デリートしていないといった物だった。

これによって、ザクスへの好感度が生まれる。

そして、ザクスが告げたのは意外な言葉だった。

何で暴走ウィザードが喋っている？

——「暴走ウィザードは自然的に暴走したんじゃない。誰かが意図的に仕組んだ事だ」

ザクスが出した答えは、『意図的なウィザードの暴走』といった物だった。

通常の暴走状態ならば、思考回路がおかしくなってしまうって言語機能を潰される。

ウィザードが喋っていた、という事は、思考回路の調整があったという事なのだ。

そんな事は自発的には出来ない、と結論付けたザクスは、外部からの介入を唱える。

ザクスは犯人は守護されていると考え、見張り番の近くに犯人が居ると予想。
今すぐにでも犯人を潰そうとするのだが、ベガは人質の救出を優先する。

——「ウィザード退治なんて、僕なら五分もかからないのに」

人質を解放し、ベガは溜息を付いた。

人質の名前はセイド——ハイドの従妹、ヒイドの孫だったのだ。

彼はドッペルというウィザードを所持しているのだが、自分の学校内では最強だという事も相まって、生意気な態度をベガに対して取る。

その場に現れたザクスがベガを急かし、ザクスとベガは犯人を潰す為に行動を開始する。

——「訪問者二人目……幹部のクソガキも喜ぶだろうな」

見張り番を突破したベガ達の前に現れたのは、浮遊する扉だった。ザクスがそれを破壊し、露になったワープホールへ飛び込む。

先に飛び込まれてしまったベガは遅れてワープホールへ飛び込んだ。

その先に待っていたのは、見覚えのある格好をした電波人間——忘れもしない、『グレイブ』の隊員だった。

どうやら、ここは『グレイブ』の幹部が管理する拠点の一つであるらしい。

今回のウィザード暴走事件も、『グレイブ』が新兵器の開発の為に起こした物らしいのだ。

門番の隊員は「『グレイブ』には連いていかない」、等といった理由で、ベガに助言をする。

だが、そういった助言は無駄な物となってしまった。

拠点の屋根が吹き飛び、幹部と思わしき灰色の装甲を纏った少年が飛び出す。

それと対決しているのは、ザクスだった。

拠点内の隊員達をたった一人で撃破したせいか、ザクスの方はボロボロである。

対する幹部側は、無傷。

戦況は圧倒的で、それを見たベガは助太刀に入る。

幹部とベガの攻撃が相殺された所で、幹部は静かに問いた。

お前の学校はどこだ、と。

『星流小学校』の名前を聞いた幹部は、忌々しげに舌打ちした。
幹部は己をカオスと名乗り、その場を去ってしまう。

ベガは疲労からか、意識を失ってしまった。

——『ここ、は……？』

目が覚めたベガが見たのは、オレンジ色基準のウィザードだった。
ザクスのよれば、黄金色の球体から現れたらしい。

ベガはすぐにマッド戦の時に自分の中に入った球体を思い浮かべた。

オレンジ色のウィザードは記憶が無かった為、ベガが彼にカシオペアと名前を付ける。

カシオペアをウィザードとし、ベガの新たな戦いが始まった。

マジック・ロンシャ 1

九月下旬。

ニホン国では『祭合』が行われており、多くの人々がわざわざニホンまで渡っている。

『魔法士』、オッドⅡフロストはロンシャの首都、ギリドーの一角を歩いていた。

年齢は十五、金髪は程良い質量を持っていた。

ニホンでは朝か昼の時刻なのだが、何せロンシャとニホンの間には九時間程の時差が存在する。

その為、ニホンと比べて遥かに寒いロンシャの夜に、オッドⅡフロストは凍える事となる。

「……、やっとか」

オッドの青い瞳が捉えた先には、十八程度の青年が居た。

髪は赤、目は茶である。

体型はオッドと同じく、中ぐらいだ。

「すまん、遅れた。で、『奴ら』は？」

「奴らの仲間がロンシャ塔の『裏』で活動しているって事が分かったよ。　どうやら、公務の魔法士だと偽って、政府にロンシャ塔の出入りを許可してもらったらしいね。　僕らは、これからロンシャ塔の裏口に突入する」

「えっ——ロンシャ塔の『裏』ってお前……政府からの許可が無い

と入れないだろ。極秘裏で活動している公務の魔法士ならともかく、俺達はフリーの魔法士だぞ」

「忘れたのか？ 僕達は今、『政府の手先』として動いているんだぞ。いや、正確には派遣だね。ともかく、政府との繋がりがあ
る状態なんだから、魔術師撃退の為にロンシャ塔の裏に入る、って
政府に連絡すればロンシャ塔出入りの許可書程度は貰えるハズだ」

「あつ、そっか」

「そうだ」

「——で、魔術師と魔法士の違いって何なんだよ？」

はあ、とオッドは思わず溜息を付いた。

この赤髪の青年は魔法士見習いで、魔法業界に関する知識が一切無いのだ。

「いい加減覚えろ。仕方ないから説明するよ——。魔法士っていうのは、ただ単に魔法を扱う者の呼称だ。ただそれだけさ。中には、国の手先として『極秘』に動く、公務の魔法士も居る。公務といっても、魔法の存在自体が世間に知られて無いけどね。で、魔術師が——『魔法連合』^{マジック・メイ}によって『犯罪者』、『異端者』として認定された者の事だ。コイツらは、公務の魔法士なんかに撃退される。伝承とかにある、黒魔術師のような物だね」

「えっと——『魔法連合』^{マジック・メイ}って確か、魔法の集中管理所だよな？」

「そう。魔法裁判やら何やらを一手に引き受け、公務の魔法士に命令を出すのも彼らだ。全世界で活躍しているけど、魔法を認めていない国では動いていないね。例えば——ニホンだ。ニホンでは一部の者が魔法を扱っているけど、我が国ロンシャヤ、お隣のフレンプと比べたらお粗末な物だ。だから、ニホンでの『魔法連合^{イン}』の活動は本当に小さい物だ——さて、分かってもらえたかな？

ピーター「オーウエン」

「ああ、分かった——じゃあ、さっさとロンシャ塔に行こうぜ」

「その前に、政府に連絡を入れないと」

オッドの視線が、ピーターに突き刺さる。

『アンチウエーブ』、第六部隊隊長、マーク「レイノルズは十五歳程の若さで隊長を任命される、という有り得ない程の力量を誇っていた。

彼はアメロツパ人のバーゼル「オムヌから送られてきた『マジック・リモコン』を回収する為に、第六部隊を率いてロンシャ塔に来ていた。

ロンシャ塔の『最深部』にマジック・リモコンを送るぐらいなら、『アンチウエーブ』の拠点に送ってくれ——と思うマークなのだが、

こればかりは仕方が無い。

実際にマジック・リモコンを転送したのはユーテ＝アリゲイトの部下であるジャミンガーなのだから。

体をどんな形であれ、電波に変えた事がある人物に魔法は扱えない体の作り——というより、才能という深い部分に関わってくるからだ。

どういった理屈かは知らないが、人間は生まれつき『能力』を持っている。

この『能力』は電波の制御、もしくは魔法の制御を行う事が出来る物である。

人間一人一人の才能が違う事と同じで、魔法を使える人間と電波を制御できる人間はきっかりと分かれている。

どちらかの『能力』を持っている人物は片方の力を扱えない。

どう足掻こうと、それは変わらない事だ。

なので、ジャミンガーを責める事は出来ない。

『アンチウェーブ』の拠点に何かを届けるには、魔法結界を突破しなくてはならないからだ。

その為、マジック・リモコンが他者に奪われない、という確証のあるロンシャ塔の『最深部』に、電波的な理論を用いて飛ばしたのだろう。

魔法一筋なマークは、ジャミンガーが織り成すワープ方式など知らないのだが。

さて、とマークは改めて気を引き締める。

今この場に居る部隊は、全部で六人。

これから、『最深部』のロックを六人で外さなければならぬ。

ロンシャ塔の中は刺すような冷気に満たされており、物音の一つすら無かった。

オッドとピーターの二人は、テムズ川をなぞるように歩行していた。魔法士としての経験故か、オッドの方は足音すら立てない。

それとは正反対に、ピーターはビルに当たって響く程の足音を立てていた。

「……よし、整備不調は無し。 僕の魔法は異常無しだ。 君の方は？」

「——そこら辺の物を光らせる事ぐらいしか出来ない俺への嫌味かよ。 まあ、一応武器は用意してある」

「いや、嫌味じゃない 君は武器を魔法として扱っていたじゃないか」

「ああ、そうだな。 武器には魔法を掛けてある。 整備不調は無しだ」

それを聞いたオッドは、薄く笑った。
茶色いマントが地面と擦れる。

「よし、じゃあ行こう」

マーク・レイノルズは解除系の魔法を使って、『最深部』へと繋がる扉を開けようとしていた手を、止めた。

ピクン、と静かに顔を上げる。

「――侵入者、だな。俺の仕掛けておいた『探知結界』を何者かが超えた。迎撃に移るぞ」

仲間達に指示を出した直後だった。

――ゴツガアアアアン！！と、第六部隊目掛けて見えな
い衝撃が飛んだ。

訳の分からない内に隊員達は吹き飛ばされていき、ロンシヤ塔の壁とぶつかる。

咄嗟に防御を張ったマークは攻撃を凌ぎ切ったものの、暗闇に居る為
に相手の動向が掴めない。

このままでは奇襲される、と判断したマークはポケットから金属輪を取り出した。

蛇の顔の彫刻が彫られている輪だ。

「（魔法戦つていうのは、スピードも重要だな――）」

そこまで言って、彼は一步下がった。

反動に備える為だ。

「*ouppopopop?*
ウロボロス!!」

彼の口から飛び出たのは、簡素なギリシア語だった。

瞬間、彼が左手に持っていた輪が、輝きを放つ。

「――!」

輝きと同時に、彼の親指から血が溢れた。

だが、彼が言葉を紡ぐと、ギリシア系の治癒魔法によって親指の出血が止まる。

治癒系を彼は得意としていないのだが――彼だけでなく、治癒系は専門の者のみが扱う魔法だ――、これぐらいの傷なら塞げる。

僅かに流れた血が、輪に落ちた。

瞬間、水で構成された剣が彼の手に収まる。

単なる水という訳ではなく、触る事も可能になった水だ。

水剣が真横に振るわれる。

そこから飛び散った水が壁に衝突し、盛大な爆発を引き起こした。

爆発をもろに喰らい、オツドの体は宙に投げ出された。
ロンシャ塔の壁に掛けてあつた斧を掴む事によって、勢いを殺す。
床に足を付けると、オツドは攻撃法から分析を始めた。

「（さっきの叫びといい、爆発の質といい——ギリシア系の魔法かな……？　ただ、水を硬化させて、それを爆発させる仕組みが分からない……僕の専門は北欧系だというのに、何だか引つ掛かる部分があるな——相手がギリシア系の魔法を主としているなら、こんな事は無いハズだ……もう少し探るべきかな）」

魔法士と魔術師の戦いが、ここに幕を上げる。

マジック・ロンシャ 1（後書き）

マークの扱う魔法の種は、案外簡単な物です。
ですので、読者の皆さんも分かるハズです。

ヒントは、北欧です。

マジック・ロンシャ 2

『マター・テック』、『新物質研究部門』のリーダー、ナット・ジエースは顔を顰^{しか}めた。

『アンチウエーブ』第五部隊と通信機を使って連絡を取り合っていたのだが、今では通信機から雑音が入ってくるだけだ。

雑音だけになる前の様子から察すると、どうも襲われたようなのだ。

恐らく、『アンチウエーブ』は『マジック・メイン』魔法連合に魔術師集団として認定され、それを撃退する為の魔法士が派遣された。と、ナットは結論付けた。

即席で考えた論だが、この線は濃厚だろう。

『アンチウエーブ』第五部隊と繋がる通信機を右耳から放し、無造作にディスクの上へ放り投げる。

それを終えると、左腕を宙に伸ばした。

彼の手の中に、新たな通信機が現れる。

^{あらかじめ}予め、ナットの意思によって通信機が現れるように、リアルウェーブの設定を行っておいたのだろう。

通信機を右耳に装着し、中央に付けられたボタンを二回程押す。

返事が来る前に、彼は口を開いた。

「コチラは『新物質研究部』のナット・ジエース。ソチラは『アンチウエーブ』の第二部隊で合っているかな？」

『合っている。 用件は？』

「ソチラは今、何をしている？」

『アナタの助言通り、二ホンへ』

「手段は？」

『アクアⅡキングⅡノア。通称、アクグⅡノアを使って渡海中、乗客は三〇〇程度。魔法以外の探知術にも対応したステルス魔法を施している為、今の所は探知されておらず——順調だ』

「了解。『マジック・リモコン悪魔術開放操作』の方は若干怪しくなってきた。だが、ソチラは気にせずに行動してくれ。それと、最優先事項はセイドⅡゴースティの回収だ」

『分かった』

細い糸を刃物で切るように、通信は一瞬で途絶えた。

事故があつた訳ではない。

ナットが通信機のボタンを三度押し、通信を遮断したからだ。話す事は何も無い、と判断したのだろう。

そして、彼は思い浮かべる。

「……、第五部隊の方は、どう対処すれば良い……？」

現在は『マター・テック』の工作中である。

ココを抜け出す事も出来ないので、増援を送るのは不可能。通信機で増援部隊を送ればいいだけなのだが、生憎と、ナットはそんなコネを持っていない。

マーク・レイノルズは思考する。

「（……、相手の姿どころか、どこに居るのかすらも分からない。
このままでは奇襲されて終わりだな——炙り出すか）」

思考を中断し、輪を構える。

素早く暗闇へと目を走らせ、策を練る。

深夜というだけあってか、ロンシャ塔内部は冷気で満たされている。
新設された窓から、星明りが漏れる。

行動は、早かった。

輪に力が込められ、マーク・レイノルズのもう片方の手の中に、水
球体が出現する。

言葉は無かった。

ただし、行動はあった。

マークが息を吐き出すと同時に、水で構成された球体の大きさが変化
する。

縦五メートル、横四メートルという化物染みた水球が、宙に浮かぶ。
マークが腕を横なぎに振るうと、水球が射出された。

「砕ける！」

言葉と同時に、輪が水球に作用する。

水球が二つに分離し、尚且つ縦五メートル、横四メートルという大きさを保ち、それぞれが壁に衝突した。

轟音が響き渡り、水球が破裂する。

原理すら分からない爆発が巻き起こり、周囲の物体を吹き飛ばした。だが、驚くべきなのはそこではない。

水球は更に分離し、五つになっているのだ。それも、依然として大きさを保ったまま。

暗闇の中に居たオッドは、思わず息を呑んだ。

水球が壁と衝突して爆発を引き起こし、そして分離した。

それも、五つになったのだ。

脅威は五割増し——理論も性質も分からない魔法が、五倍の強さになって襲ってくるのだ。

対策を立てられていない内は、恐怖でしかない。

「くっ——巨人理論は僕の得意分野じゃないけど、やるしかないか！」

彼は両腕を、水平に出す。

唇の表面を歯で切り、血を流す。

コレが魔法の合図だ。

北欧神話において、巨人族がアース神族に受けた攻撃を象徴する血

だ。

そして、血の象徴である『赤』は、巨人族であるムスperlが住む灼熱の『ムスperlヘイム』を象徴する色だ。

これ程の要素が揃えば、嫌でも巨人系魔法特有の破壊力が秘められた炎が炸裂する。

そして、それは同時にオツドが炎系魔法に長けていない事を表わしていた。

巨人系魔法は威力が絶大な代わりに、調整が難しい。

それと同時に、『大喰らい』である巨人から力を貰う——巨人系魔法はそういった作り方をしているが、実際に巨人が存在するかどうかは不明だ。とにかく、作り方に忠実なのが魔法の効果である——為、逆にスタミナを喰われてしまうのだ。

戦に出る巨人達は、スタミナを必要とするのだから。

尚且つ『大喰らい』なのだから、そのスタミナ量も半端ではない。つまり、大量のスタミナが奪われてしまう。

巨人系魔法があまり使われないのには、こういった訳があるのだ。巨人系魔法を使ってしまおうという辺りは、オツドはそういった絶大な威力に頼らないと炎魔法の威力を引き出せない——という事なのである。

ちなみに、巨人系魔法は使用するまでの段階が楽な魔法でもある。

そういった面でも、やはりオツドは炎魔法に慣れていない。

ともかく、ムスperlヘイムの神話を大真面目に再現したのが、オツ

ドの炎魔法だ。

炎に熱せられ、オッドの左にあった壁の一部分が溶ける。

そして、水球の群れが、待ち構える炎の壁へと衝突した。

何が起きたか——、というのを理解できた者は少なかっただろう。

床に倒れている者達は勿論——ダメージを受けたせいで、まともな思考が出来ないからだ——、オッドですら首を傾げてしまうような現象なのだから。

水球は炎壁に当たるや否や爆発した。

だが、衝撃は無かった。

泡が破れるような、そんな感覚だ。

ただし、『音』の面での爆発はあった。

巨大な泡が弾けたのだから、それ相応の音が響く。

思わず耳を塞いでしまうオッドだったが、彼は目にした。

目の前に張られる、膨大な量の水蒸気を。

弾けた泡がどうやって水蒸気になったのかは知らないが——魔法的な介入も加わっているハズだ——、ともかく、自分で自分の視界を潰してしまったのだ。

炎のせいで、水是水蒸気となってしまった。

そして、更なる事実にもオッドは気付く。

水蒸気の群れが、オッドが先程溶かした壁の穴へと向かっているの

だ。

まるで巨大な雲が猛スピードで動いているかのように、水蒸気の群れは穴へと逃げていく。

それは当然、外側からも見えている訳だ。
オッドは今更ながらに気付かされる。

迎撃される可能性すらも抱えてロンシャ塔に侵入した人物が、弱いハズが無いという事に。

次の瞬間、オッドの脇腹を激痛が走った。

思わず距離を取ろうとするが、オッドの左肩に更なる激痛が走る。

叫び声を上げたい所なのだが、戦闘中だというのもあつてぐつと堪える。

全て、マークの思惑通りだったのだ。

あれだけ巨大な水が——それも、爆発する水が大量にコチラへと迫ってきたら、避ける事は出来なくなってしまう。

となると、迎撃するしか無くなる訳だ。

かといって、雷撃では光が目立つ。

同じ『目立つ』でも、辺りに広がる炎なら位置を特定されない——
普通の魔法士なら、そう考えるはずなのだ。

マークは、それを逆手に取ったのだ。

水滴一つ一つを魔法を使って水全体の動作とリンクさせる——つまり、マークの放った水の内の水滴が一つでも炎に触れて蒸発すれば、

水全てが蒸発する仕組みとなっていた。

更に、ロンシャ塔の構造もマークは利用していた。

ロンシャ塔は三〇年程前に改築されており、全面鉄製となっているのだ。

今の建築では鉄などもはや時代遅れなのだが、そこは昔の時代を尊重した作り方で行く事となった。

普通の炎では溶けない鉄なのだが——未来というだけあって——、魔法的な炎、そして極度に温度が高い炎に当たると溶けてしまう。

その二つを兼ね備えた魔法の炎は、鉄の壁を一部分とはいえ、溶かしてくれた。

すると、水蒸気の塊は外へと逃げ出してしまう訳だ。

それを見たマークは水蒸気の漏れ出した位置から相手の居場所を特定、攻撃を仕掛けた訳である。

実は、それ以外にもマークは利用していた物がある。

五つもの水球を使ったのは水蒸気を大量発生させる為でもあったのだが、魔法士の誘導の為でもある。

爆発する水球を——それも巨大で、数も多い——を見た魔法士は、威力の高い魔法でそれを潰そうとするハズだ。何せ、危険度が高いのだから。

雷の可能性は無いので、最終的に炎となってしまう。

つまり、マークは意図的に壁を溶かさせた訳なのだ。

オッドは、そこまで分かっていなかった。
何故なら、マークの水剣が次々と襲ってくるからだ。

「きゅーっ——があっ——！？」

水剣がオッドの腹部に直撃し、小型の爆発を起こす。
肺の中の酸素を一気に吐き出したオッドは、二メートル程吹き飛ばされる。

吹き飛ばされる途中で、自らに当たればダメージを負うと判断したのか、固定が緩んでおり、今にも外れそうだったハンターを自らす。

カラン、と乾いた音を立てて、ハンターが落下した。
連想されるのは、死神が鎌を振り下ろす音だ。

何度も地面でバウンドしたせいか、ハンターには亀裂が走り、内部の機類がはみ出していた。
ジジジッ……と、奇妙な音を立てて、ハンターは床に倒れている者達の仲間となった。

マジック・ロンシャ 3

ピータースリー・スティックは手に握っていた三段槍マジックピーツを壁に掛け直す。
三段槍は表向きは一般的な武具なのだが、魔欠片を流しやすいように細工がされている事が多い。
内部に魔欠片を循環させる部品が入っているのだ。
三段槍はその性質上、不意打ちに適した武器だ。
スリー・スティック

ピーターはオーウェンはオッドフロストの命令通り、最深部の周囲を見張る魔術師達を不意打ちで潰していたのだ。

ピーターは魔欠片マジックピーツの練りを得意としない為、周囲に放出する魔欠片マジックピーツが小さい。

つまり、魔術師達にも助付かれずに倒すのには、不意打ちが最も適していた。

最深部でオッドが交戦している間に更なる刺客が割り込んでいかないうちにここで戦ったのだが、どうやら仕事は果たせたようだ。

最深部へと繋がる扉を開ける為には、魔欠片マジックピーツが必要となる。
扉に仕掛けられた魔法が魔欠片マジックピーツを感知すると開く仕組みになっているのだ。

魔欠片マジックピーツの練りが苦手なピーターは不安を覚える訳だが、かといってここで突っ立っている訳にもいかない。

ロンシャ第五王女、オクタヴィアは溜息を付いた。

彼女が居るのはバッキンガム宮殿——の外だ。

このえへい近衛兵どころか、護衛一人すら付けていない。

そこら辺の王室関係者が知ったら、泡を噴いてぶっ倒れそうな状況にある訳である。

そんな彼女の手にあるのは、デュランダーナ——またはデュランダル、ドウリンダナ——だ。

英雄・ローランが使っていた『聖剣』だ。

一見するとただの剣にしか見えないだろうが、真実はそうではない。

このデュランダーナには数々の魔法細工が施されているのだ。

強力な力を誇るデュランダーナを扱えるのは、『印』と呼ばれるローランと似通った性質を持った者のみ。

『印』は魔欠片^{マジックピース}放出時の性質の事で、それがローランと似ている場合はデュランダーナの真の力を引き出せるのだ。

そして、第五王女オクタヴィアと、お隣のフレンプの魔術師・サミユエル、マーカスが『印』を持っている事が確認されている。

ただし、マーカスの方は『魔術師』^{あくにん}な訳だ。

オクタヴィアは手の中に視線を移す。

デュランダーナ以外にも、ロンシャには^{ランドマジック・コラム}国家強力魔法品はいくらか

存在している。

バッキンガム宮殿の奥にある、『ライセンス』。
近代に開発され、そして盗み出された『悪魔開放制御』。
マシクリモコン
心酔した職人が北欧神話を下にして作り上げた『ヒルデイスヴィー
ニ・ブレード』……。

と、上げればキリが無い。

そして、サミュエル・マーカスは逃亡生活をより円滑にする為、デ
ユランダーナを狙っている。

常日頃から、オクタヴィアは脅威に晒されているのだ。

上の者——つまり、姉達と母はオクタヴィアとデユランダーナを囷おとり
とし、サミュエル・マーカスを潰す事でフレンプに恩を売ろうとし
ている訳だ。

恩を売ってどうなるか、なんていうお粗末な質問は王室の誰もがし
なかった。

一五歳の第六王女・イーデイス、一二歳の第七王女・エマですらこ
れは分かっている事だった。

僅か一八歳のオクタヴィアはデユランダーナを扱える、という特徴
を持つてはいるものの、若さのせいで王室からは軽視されがちだ。
その為、「囷にするのは止めてくれ」、とオクタヴィアが叫ぼうが、
誰も相手にしてくれない。

孤独だった。

国の思惑に吞まれたオクタヴィアは、ひたすら孤独だった。

だからこそ、こんな事をしたのかもしれない。

『アンチウェーブ』をナット・ジエースと共に指揮して、不遇を取り払おうとしたのかもしれない。

だが、彼女はもう止まらない。

罪を意識しようとも、もう止まらないのだ。

第二王女・クリステイーナが雇ったフリーの魔法士・オッド達に自分の正体を暴かれるのも時間の問題だと思う。

彼女は、豪華なドレスの中からイヤホンを取り出した。
通信機だ。

左耳にイヤホンを装着し、二回程ボタンを押す。
覚悟は決まっていた。もう、戻れない。

「こちら、英国第五王女・オクタヴィア。そちらはナット・ジエースだな？」

手の中にあるデュランダーナを横に放り投げる。

こんな物があるから、自分は囿にされたのだ。

彼女が左腕を振りかざした時、その中にあったのは『ライセンス』

——銀色の魔法銃だった。

「第八部隊を新たに二ホンへ——二ホン政府との協力を持ち掛けて」

答えを待たず、イヤホンの電源を切った。

『ライセンス』を腕の中で転がし、彼女は笑みを浮かべる。もう、戻れない。不遇を取り払わねばならない。

「——さて、私も行動しないと。目標はロンシャ塔。オッドフロストの抹殺を最優先事項とする」

『ライセンス』が不気味な光を放つ。

それと同時にデュランダーナが浮遊し、宙を三回舞った。デュランダーナを見捨てたオクタヴィアは、ひたすら進む。

バッキンガム宮殿内部。

オクタヴィアの動向を、窓から伺っていた者が居る。

「——中々上手い動きをしているわね、オクタヴィア……さて、私

も動かないと」

英国第一王女・マーバラは笑みを漏らした。

ニホン政府——の地下。

『ザ・ファイブ・ワールド・ウェーブ・バトル』の混乱によって、三権分立が終了し、政治が団結した建物——『国家本部』の地下である。

総理大臣、課頭^{かず}会得^{エトク}は、モニターと向き合っていた。

そこに映るのは、優越そうな笑みを浮かべるギャラクシーだ。

『ふむ、私の計画もようやく落ち着いた所だよ。ベガ達は我々の行動を妨害しようとしているようだが、上手くはいかんだろうな。

さて、今回はキミに話がある』

「——。」

『『ゼロラグナ』のボスに連絡を入れておけ。』
『一〇月九日、ベガをロンシャへと向かわせる』——とな』

「では、『アレ』の始動時期は？」

『——一〇月一九日に始動する』

「——了解です。『ゼロラグナ』のボスが手を回す可能性もありますが、放っておいても——」
『大丈夫だ』

マーク・レイノルズは拳を握り締め、そして開いた。
開かれた掌のひらの中に、野球玉程の大きさをした水球が作られる。

「——ふっ!!」

マークが息を吐き出すと同時に、水球が爆発する。
四方八方へ水滴が飛び、雨となって降り注いだ。

それは、つまり——

——水滴が一つ一つ爆発する事であり——

——容赦なく降り注いだ雨は、例外なく爆発した。

「おぶ、アああああああああああ!!!!」

オッドの体が真上に跳ね、水溜まりの中をバウンドしていく。
あまりの威力に、水溜りが丸ごと弾かれていた。
塔の中に雨が降る、という奇妙な状況の中、マークは左腕を横に突き出す。

「oo p o o b ? p o o ?
ウロボロス!!」

ギリシア語の叫びと同時に、床に溜まった水がマークの背後へと集結していく。

N極がS極に吸い寄せられるように、だ。

マークの握っていた輪が金色に輝く。

バンッ!! と、爆発音が炸裂した。

水は蛇となり、咆哮を上げる。

マークの数倍はある大きさを持った蛇は、ロンシャ塔内部に豪雨を起こした。

「ぐ、があ——っ」

壁を支えとし、オッドが起き上がる。

目の前にあるのは、巨大な蛇とそれを操るマークだ。

「——（あ、れは……）」

蛇と、爆発した水。

そして、あの輪とマークが流した血——。

そこまで考え、ようやくオッドは分かった。

「そつい、う、事、か――」

オッドは薄く笑う。

マジック・ロンシャ 3（後書き）

今回登場したデュランダーナは実在する剣です。
お暇な方は、調べてみてくださいね。

更に、バッキンガム宮殿も実在する建物です——知ってる方、多い
と思いますが。

ただ、今作品のバッキンガム宮殿と実在するバッキンガム宮殿は名
前が同じなだけで、構造やその他が大きく違ってきますので、そこ
ら辺をご了承ください。

それと、フレンブル＝フランスです。

マジック・ロンシャ 4

ピーターは細長い通路を歩いていた。
右手には細長いレイピアを握っている。

通路の壁には歴史ある魔法の品が並んでおり、一般展示できないような極秘物品も数多くある。

この通路は最深部へと続く部屋——つまり、オッドが居る場所へと通じている。

要するに、この通路とオッドの居る部屋を越えた先にあるのが最深部だという事だ。

長さは大体、三〇〜五〇メートル程ある。

「……、？」

ピーターは顔を上げた。

その先に広がるのは、奇抜なデザインが施された天井だ。
不自然な魔欠片マジックピースの乱れを感じる——、とピーターが思うと同時、その背中に激痛が襲い掛かった。

「あ、——！？」

声を上げる暇も無かった。

真っ直ぐに吹き飛ばされたピーターが捉えたのは、女性の姿だった。
一七程の少女だった。

片手に銀色の銃を構えた第五王女だった。

マークとオッドの視線がぶつかった。
ロンシャ塔内部はマークの魔法による雨のせいもあって、冷気に包まれている。

片方は苦悶を浮かべ、片方は超絶する。

苦悶を浮かべるのがオッドで、超絶しているのがマークだ。

ただし、オッドの顔には気味の悪い笑みが貼り付けられている。

誰がどう見ても不利な状況だというのに、それすらも感じさせない笑みだ。

(……何でアイツは笑っている？——いや、考えても意味は無いな。
目の前に居る敵を潰して、任務を進めなければならぬ)

決意したマークは、手の中にある輪をきつく握り締めた。
息を吐き出すと同時に、マークの指に小さな切れ目が走り、出血した。
血は輪へと伝わり、落ちた血が水溜りに溶け込んでいく。

「ウロボロス!!」

消えかけていた水の大蛇が、再臨する。

咆哮が上がり、豪雨の勢いが増した。

もはや視界は煙を張られたような状態になっており、まともに情報を得てはくれない。

それほどの雨の中、オッドは笑っていた。

マークがオッドの人影に気付くよりも早く、オッドは魔欠片マジックピースを練り終わっていた。

オッドが扱う魔法の一つ、『北欧神話の現象を再現した物』が発動する。

マークはこの日初めて、『驚き』という物を表情に出した。
無理も無い。

彼の背後にあった水蛇が一瞬にして弾け、雨が降り止む——それ所か、マークが持っていた輪が破裂した。

マークがそれに気付き、目を見開いたと同時に、雷撃が炸裂した。

マークの体が真上に持ち上げられ、そのまま地を滑る。

かといって、これぐらいでくたばるような者は、魔法を扱う人間の中には存在しない。

練り込まれ、放出された魔欠片マジックピースが魔法士の周りを囲い、自然とバリアを作り上げるからである。

電波人間のアーマーと同じで、何も意識して出現させる物ではない。

マークの体は床を滑り、階段へと続く扉に衝突した所で勢いを止めた。

「うっ、が——。 どういう事だ……」

「簡単だ」

声に、マークが顔を上げた。

オッドの足取りはフラフラしており、安定しているとは言い難いものだ。

「君の魔法は伝承上の『ウロボロス』を再現し、そこにギリドニア流派を加えた物にも見えるが、そうじゃない。ギリドニア語によつて魔法の元となる物が北欧神話の伝承だという事を隠し、ウロボロスによつてヨルムンガンドを表わしていた訳だ」

「チツ——お前、そういう事が……さっきの攻撃、雷神トールの伝承を応用した物だろう……？」

「そつだ。君がわざわざ細工を施してまで炎系の魔法を僕に使わせるようにしたのは、もう一つの理由があつたからだろう？ 伝承を再現したオリジナルじゃない魔法——つまり、理論を考えるのが面倒だから、適当に引用した魔法っていうのは、結構伝承を忠実に再現している事が多い。そして、北欧神話では、ヨルムンガンドはトールによつて殺されている——だから、トールの持つ『雷』の性質が苦手なんだろう——最も、そこに転がっているハンターによる感電が無ければ、広範囲に電撃が伝わらなくて、雨を打ち消す事が出来なかつたけどね。」

そう言つて、オッドは壊れたハンターを指差す。

先程、オッドがマークに吹き飛ばされた際に落とした物だ。

所々が破損しており、バチバチ……と電撃音が微かに聞こえてくる。

「……。」

「水が爆発した理由も簡単な物だ。ヨルムングンドはトールに敗れこそしたが、己の『毒』によってトールを道連れとしている。君は水を『毒』に対応させる事で、『毒』の持つ『破壊力』を水に与えた。違うかい？」

「――。」

「君がヨルムングンドの大規模魔法――つまり、あの蛇を出現させる度に出血していたのも、やっぱり伝承を忠実に再現しすぎているせいだ。この魔法、君が考えた物じゃなさそうだね――僕がさっき使ったトールの電撃だって、一〇〇年前に活躍した魔法士の老人が書き残した書物から引用して使っているだけだ。アレンジは加えてあるけどね」

「ああ、そうだよ――。蛇を出現させる度に出血していたのは、『毒』を水に対応させる為だ。ヨルムングンドの『毒』はトールに殺される事によって効力を示したんだから、『毒』を発動させる為には傷を負う必要があつたんだよ！」

敗北した屈辱感からか、無気力感からか、マークはベラベラと自分の魔法について語る。

これは敗北宣言にも等しい行為だ。

何せ、自分の手の内を自分の口で漏らしているのだから。

「さて、じゃあ――留置所に同伴してもらおうか」

「留置、場……！？」

信じられない、といった様子でマークが呟く。

それに対し、オッドはポケットから一枚の紙を取り出した。
今にしては珍しい物である。

そこにはデカデカと、『魔術師集団討伐』と書かれていた。

マークは書面に目を走らせ、丁寧に一字一字を読み上げていく。
まるで、大人が小さな子供に言い聞かせるように。

「『アンチウェーブ』の過激活動を、我々は『魔術師集団』として認定。速やかに討伐をするべきだと判断した』——」

オッドは何も言わなかった。
ただ、わなわなと震えるマークを見下ろしているだけだった。

「ふざけんなあああああああ！俺達のやってる事は全魔法士にとっても有益な事なんだぞ！！忌々しき『魔女狩り』の報復を果たし、魔法を迫害する事によって生まれたテクノロジー社会を潰す事こそが、魔法士の恨みを晴らす方法だっていうのに！！」

「……未だに『魔女狩り』の事を根に持っているのは、君たち『アンチウェーブ』ぐらいだろうね——そうだなあ、交渉しよう」

「……しょう……？」

「ああ、そうだ。僕の条件を呑んでくれば、君を魔法士として認定する——ロンシャの方にも掛け合って、公務魔法士にもらえるようにも頼んでみるよ。さあ、どうだい？……『アンチウェーブ』の情報を渡してくれ」

魔法を扱う者としてのプライドが高いマークはしばらく沈黙した後、やがて口を開いた。

どこか頼りなさげな瞳で、虚空を見つめている。

「……。このロンシャ塔には、『悪魔開放制御』^{マジック・リモコン}がある。魔法によるセキュリティによって閉じられた、最深部にな。『アンチウェーブ』の上層部は、これを手に入れたらしい——俺はその命令に従っただけだ」

「他には？」

「——上層部は、計画の運行にとって重大な鍵を握る人物が二ホンを居ると判断した。名前はセイド・ゴートイック……かのヒイドの孫だ」

「……くそっ！ 情報によれば、あの子は最近事件に見舞われたそうじゃないか——しかも、まだ幼いんだぞ！ 事件に再び巻き込み、幼い子供に寄ってたかって同じような恐怖を味わせるっていうのか……！？」

ギリッ、とオッドの歯が鳴る。

彼の中にあるのは、純粋な怒りだった。

ウィザードの人質に取られて恐怖を味わった子供に、更なる恐怖を与える……汚い大人達のやり方に、純粋な怒りを覚えているのだ。

その時、オッドの背後にあった扉が粉々に砕け散った。

煙を掻き分け、ピーターが駆け込んできた。

服は所々擦り切れており、手に持っているレイピアにはヒビが入っていた。

「ピーター、どうし——」

「オッドオー——！！ 避けるおお！！」

ピーターの背後に居る王女を確認したオッドは、訝しげな声を発する。

それに対して、ピーターは叫んだ。

ピーターがオッドを押し倒すと同時、その場を衝撃が襲った。

視界が真っ白に染まり、部屋内の物品が粉々に砕けていく。

オッドはピーターに押し倒されたまま、状況を掴もうと目を動かした。

部屋の入り口に立っている王女の手にあるのは、『ライセンス——
ロンシャが誇る、最大級の魔法品だ。一際巨大な銀色の銃の周りに、銃口が五つ程並んでいる。』

銃全体での大きさは、通常の拳銃の三倍程ある。

魔法の加工を施された銃は、この部屋全体を攻撃したのだ。

オッドは息を呑む。

あんなのと戦えば、ただでは済まない事必須だ。

最も、『魔法連合』^{マジック・メイ}によつて『最強』の各印を押されている八人の『魔卿』^{まきよう}か、WAXAの『裏サーバー』に登録されている、欠陥したコードナンバーを持つ者達ならどうにか出来るかもしれないが。

だが、オッドとピーターはそんな実力を持たない。

「不安材料は消しておくのが私のポリシーだから——申し訳ないけど、消し屑になってもらっわよ」

マジック・ロンシャ 5

自分の上に^の押し掛かっていたピーターが退き、ふらつきながらもオツドが立ち上がった。

彼の瞳は、『ライセンス』を構えるオクタヴィアへと向けられている。

何が、どうして、分からない、——疑問だけが、頭の中をぐるぐると回っていた。

「一体、何が——何が起きている？」

王女がロンシャ塔に現れた。

既にその時点から、何が何だか分からないのである。
現時刻は深夜。

そんな時間に王女が外出するなど、どう考えても有り得ない事だ。
仮に外出するとしても、近衛兵やら兵士やらが大量に付いているハズなのだ。

そして、何で『ライセンス』を持っている？——あれは武器のはずだ。

『ランド・パワー・マジックコラム
国家強力魔法品』に登録されている、強力な魔法アイテムだったハズだ。

それを、何で王女が持っている——いや、確かに『ライセンス』には『王室の血を引く者のみ扱える』、という細工が施されている。
だからといって、何で王女がそれを持っているのだ——あれは戦い

の道具だ。

オッドの疑問に、オクタヴィアは簡略的に答える。

「分からない？ 『アンチウェーブ』の妨害をするアナタを潰しに来た。アナタを雇った第二王女の方を潰してもいいんだけど、それじゃリスクが高すぎるからね。それに、アナタは中々危険な存在だし……」

「言ってる事が分からないのですが」

オッドは問う。

極めて無表情な王女に、ただ問う。

「……分からない？ 私と『アンチウェーブ』のボス、それとアメリッパの協力者によって『アンチウェーブ』という組織は率いられている」

つまり、こういう事だ。

『邪魔者粉碎』——、邪魔者イコールオッドな訳で、オクタヴィアの宣言はオッドを殺す、という物だったのだ。

「……、何でそんな事を」

「言うと思う？——敵に己の秘密を明かすなんて、戦場ではやってはいけないのだからね」

王女らしからぬ発言と共に、彼女の体が高速で動いた。彼女の体がぶれ、気付いた時には既に銃を構え、狙いを定めていた。

オッドが何かを言うよりも早く、『ライセンス』の側面にあるスコ
ープが光を放った。

瞬間、赤色のレーザーがそれぞれの銃口から射出される。

オッドは思わず防御の体制を取ろうとするが、そこで気付いた。
レーザーの軌道は自分に向かっているのではない。
ピーターへと向かっているのだ。

「くっ——オオオオあああああああ——!!」

絶叫し、駆ける。

ピーターの方は現状に気付いていないらしく、それどころかレーザ
ーの存在を視認出来ていなかった。
オッドは懐に忍ばせてあった縦五センチ、横六センチ程の石版を取
り出す。

小さな石版に『守護』の意味を持つ言葉を羅列した物だ。

魔法的な意味合いは小さい為、防御力も弱い。

だが、このレーザー程度なら何とかなるはずだ。

レーザーの速度と威力からして、『ライセンス』どころか普通の魔
法以下の威力だろう、あのレーザーは。

ただし、若干魔法を使えるだけで、それ以外は一般人と変わらない
ピーターがその攻撃を受ければ、結果は分かっている。ピーター
の周囲にはどうせ、無意識下の防壁すら築かれていないのだから。

オッドの絶叫に驚くピーターを無視し、思いつ切り石版を投げつけた。

これぐらいの距離なら、届く——石版はピーターと接触し、三六〇。全方位に防壁を築き上げる。

防壁、といっても窓ガラスを薄くしたような物だ。

だが、それを見たオクタヴィアは凶悪な笑みを浮かべた。

彼女が手首のスナップを曲げると同時、レーザーの軌道が変わる。

ピーターへの狙いは^{おとし}囷だったのだろう。

守護をそちらに回させてしまう事で、オッド自身の防御を薄くしたのだ。

「が、アああああああ——！！！！」

赤いレーザーが、オッドの体を貫く。

傷口からボタボタと血が溢れる——恐らく、先程のオクタヴィアの動きで威力も変化していたのだろう。

即座に回復魔法を使うが、何せ回復魔法は使う人によって差が激しく出る。

オッドの傷は回復していくが、『瞬間的』という訳でもない。こういう面ではやはり、魔法側は電波側に負けているだろう。

痛みあまり、床をのた打ち回るオッドへとオクタヴィアが近づく。ピーターが叫び、砕けたレイピアを手に取るが、オクタヴィアが『ライセンス』による銃撃で沈める。肩から血を流し、絶叫を上げるピーターを無視してオクタヴィアはオッドへと銃口を向けた。

オッドの引きつった顔が、オクタヴィアの色白な顔を見上げる。

「……私も、こんな事はしたくないんだけどね——仕方の無い事だ」

一瞬、ほんの一瞬だけオクタヴィアの表情が固まったが、躊躇無く引き金が引かれた。

今度こそ、容赦無い銃撃だった。

一切の手加減が為されていない、正真正銘の『ライセンス』の攻撃だった。

攻撃は、視覚的な情報では捉えられる物ではなかった。

そういう魔法なのだ。

オッドの顔が一瞬固まり、直後に轟音を上げて、一部の床と共に落ちていった。

オクタヴィアはそれを最後まで見る事無く、踵を返す。

オッドはフロストが墜落した先は、『旧品収納所』と呼ばれる閉鎖部屋だった。

その名の通り、ロンシャの歴史に刻まれた品を収納しておくスぺー

スである。

その中央へと、オッドの体がつっ込んだ。
派手な音を立てて、粉塵が撒き上がる。

（が、あ——一体、何が——）

激痛のせいもあるのだろう、オッドは状況を把握できずにいた。

『ライセンス』の力が全力で振るわれたのだから、自分は木っ端微塵になっているハズなのだ——それが、何で生きている？

『ライセンス』を相手にして、未だに息をされていて、という事自体が既に奇跡なのだ。

そして、彼は捉える。

横倒れになっている彼の隣に転がった、『^{ホーリック}聖杯』と呼ばれるコインを。

更に、『^{ホーリック}聖杯』は青白い光を放っていた——。

『^{ホーリック}聖杯』は、かのアーサー王が作成した——かもしれない——魔法品の一つで、アーサー王自身の魔法が掛かっている。

その魔法とは、『認定』——アーサー王が設定した『条件』を満たし、尚且つ『実力者』である者を見定める物だ。

そして、『認定』が発動すると、『^{ホーリック}聖杯』が光に包まれる、という伝承がある。

この光が発生していない時に、『^{ホーリック}聖杯』に触れると、触れた者が狂死するらしい。

『^{ホーリック}聖杯』が『認定』した者は、『^{ホーリック}聖杯』を自在に操れる——と言われている。

オッドは生唾を飲み込んだ。

何かの間違いではないか、自分が『認定』されたという事ではないのではないだろうか？……次から次へと、オッドの中に考えが浮かんでいく。

倒れたまま、彼は『^{ホーリック}聖杯』から目を逸らした。

眩しさから逃れる為の行為だったのだが、それが予想外の事態を引き起こす事となった。

オッドが目を逸らした先で捉えたのは、岩に刺さった全長六〇〇センチ程の剣だ。

ロンシャの魔法士なら、誰でも知っている剣だった。資料なんかでも、良く見かける。

伝説の剣、『^{エクスカリバー}王者の聖剣』……アーサー王が岩に封印し、魔力を潰した剣だ。

今度こそ、今度こそオッドの両目が見開かれる。

痛みは、既にどこかに行ってしまっていた。

それほどまでに、オッドが捉えた光景は凄まじい物だったのだ。

湖の中に沈み、姿を消したハズの剣——それが、目の前にある。

『^{ホーリック}聖杯』も併せて、魔法士の一人であるオッドが興奮しないハズが無い。

のろのろとした動きで立ち上がると、『^{ホーリック}聖杯』へと近づいていった。

『認定』された者以外でないと死んでしまつとか、そんな事はもうどうでもいい。

熱に浮かされたように、オッドは一步一步を踏みしめていく。第三者が見れば、まるでゾンビのようだと言つた事だろう。

『ライセンス』の傷が癒えていない為、オッドの両手は常に壁にあつた。

重心を全てそちらへと預け、オッドは歩く事に全力を注ぐ。

それから、ゆつくりと屈み込んだ。

彼の足元には、『^{ホーリック}聖杯』が——CDディスクにも似た青白い光を放つコインへ、手を伸ばしていく。

電撃に弾かれたように、オッドの手が『^{ホーリック}聖杯』の手前で止まった。緊張の表れであつた——オッドは息を深く吸うと、勢いを付けてコインに触れた。

——静寂が、場を支配する。

オッドの呼吸だけが、部屋の中に浅く響いていた。

何も起こらなかった。

ただ、光が止んだという事以外は……何も起こっていなかった。

オッドはコインを掌に収め、ゆっくりと立ち上がる。

コレが、コレが意味する事は——『認定』。オッド＝フロストは、
『^{ホーリック}聖杯』に認められたのだ。

彼はコインを握り締め、二、三回ゆっくりと瞬きする。
たつぷりと三〇秒も使ってから、彼は反応した。

「うおおおおおおお……！」

絶叫は、言葉ではなかった。

ただの雄たけびであった。

気付けば、『ライセンス』の傷による疲労も消えていた。

そして、彼は見てしまった。

コインの表面に書かれた『文字』を。

英語でも、ニホン語でも、何語でも無い——それどころか、地球に
存在しない言葉なのだ。

直後、オッドが絶叫し、床をのた打ち回った。

コインが赤い光を放っている。

「ぐ、があ——ッ!？」

呻くも、オッドは再び立ち上がった。

そこで、ようやく思い出す。

コインの表面に描かれた文字——確か、アレはアーサー王が作り出した『魔字』だ。

魔法的な意味合いのみを込めた文字で、認められた者以外が見ると、『魔字』によつて脳が攻撃に晒される——確か、『認定』されていない者が力を扱わない為の防衛策だったハズだ。そこまで思い出したオッドは、思わず身震いした。

『^{ホーリック}聖杯』を諦めようと踵を返しかけたオッドだが、『^{ホーリック}聖杯』はそれを良しとしなかった。

独り手に浮遊し、二、三回程回転する——かと思えば、銃弾のような速度で射出された。

自動的にオッドの手へと収まった『^{ホーリック}聖杯』は、黄色の光を発する。ビリビリと、オッドの手に痛みが走った。

野球ボールを素手で取った時のような感覚だ。

恐々とコインを覗き込んだオッドは、思わず目を見開いてしまった——『魔字』を、英語として理解できる。

『認定』完了。これから言う事に従わなければ、命は無いと思え』

コインに書かれていた文字が、切り替わっていく。
インクが染みていくように、次の文面が現れた。

『オッドⅡフロスト。お前を『認定』した。『^{ホーリック}聖杯』を所有せよ。
他の者に引き渡すな』

オッドが読み終わると同時、タイミングを見計らったように文が消えた。

新たな文が、再び生成されていく。

『^{ホーリック}聖杯』を握ったまま、『^{エクスカリバー}王者の聖剣』に触れよ。お前の魔法を使い、『^{エクスカリバー}王者の聖剣』に^{マシクビーツ}魔欠片を注ぎ込め。下手な真似をすれ

ば、忠告通りお前は死亡する。その代わり、お前がコチラの言う事を聞けば、お前の力を目覚めさせてやる』

もはや脅迫な訳だが、断る訳にもいかない。

『魔字』なんていう防衛策もあるのだから、人間を殺す事も可能なだろう。

単なるハツタリではない。

仕方なくオッドは『^{ホーリック}聖杯』を握り締め、『^{エクスカリバー}王者の聖剣』が突き刺さった岩へと歩き出した。

先程と比べると、大分足取りは安定してきている——ようにも思えた。

オッドは息を深く吐き、ゆっくりとした手つきで、もはや岩と化した『^{エクスカリバー}王者の聖剣』の柄へと手を伸ばしていく。
^{マジックビーツ}魔欠片を常に指先から放出している状態で、だ。

オッドの指先が『^{エクスカリバー}王者の聖剣』に触れた途端、彼の指先に鋭い痛みが走った。

「ッ——！？」

慌てて手を引いたオッドの指先からは、決して少なくない量の血が

溢れていた。

思わず指へと目を向けてしまっていたオッドだが、彼は改めて前を向いた。

そして、彼は気付く。

『^{ホーリック}聖杯』を握っていた方の手が、勝手に『^{エクスカリバー}王者の聖剣』を掴んでいた事に。

瞬間、^{エクスカリバー}バアンツ！！と、ガラスが砕けたような音と共に、『^{エク}王者の聖剣』を締め付けていた岩が砕けた。ついでに、『^{エクスカリバー}王者の聖剣』自身に付いていた岩も砕けた。

ありったけの金貨を掻き集めても成し遂げられないような黄金色の光と共に、『^{エクスカリバー}王者の聖剣』が宙に浮かんだ。

ルビーの装飾が柄の中央に施されており、剣身の中央には金の装飾があった。

『^{エクスカリバー}王者の聖剣』を握っている方の手の指の間から、不自然な軌道を描いて『^{ホーリック}聖杯』が宙へと飛び出した。

オッドの瞳が、『^{ホーリック}聖杯』に書かれていた文を読み取る。

『オッドⅡフロスト、お前は『^{エクスカリバー}英雄の聖剣』を所有せよ。これから先、お前はかなりの力を得るだろうが、それはお前自身の力であ

つて、『^{ホーリーク}聖杯』や『^{エックスカーリバ}英雄の聖剣』の力では無い。私は、お前の潜在能力を引き出す手助けをしただけである』

その時、オッドはようやく気付けた。
このメッセージを書いた人物が誰なのか、を。

オッドは静かに笑った。

何故だか知らないが、気分は良い。
左手に、金色に輝く『^{エックスカーリバ}英雄の聖剣』を、ポケットの中には先程掴んだ『^{ホーリーク}聖杯』を――、

――負ける気は、しなかった。

第五王女・オクタヴィアは舌打ちした。

彼女は片手に『ライセンス』を握っているが、下手に魔法の暴発を起こさない為にも、なるべく出力は抑えてある。

相手はピーター……オッドの連れである。

立ち去りかけたオクタヴィアの足を掴み、ピーターはそこら辺から
もぎ取ってきた『三段槍』スリーティックを使って奇襲を仕掛けたのだ。

その後はそこら辺にある武器を最大限までに駆使し、オクタヴィアを困らせていたのだ。

本気になれば一撃で倒せるのだが、魔法の扱いに長けていないオクタヴィアはどうしても暴発を抑える為に出力を低くしないとけない。

『ライセンス』が暴発したら、それこそロンシャ塔が吹き飛んでしまう。

本気を出すとするば、それは本場の魔法士相手のみだ。

ピーターの投げた槍を打ち落とし、オクタヴィアは構える。
続けて剣が飛んでくるが、コチラは細いレーザーで対処する。

レーザーに貫かれ、剣が消滅した——焼かれたのだろう。

（——面倒臭い……一気に終わらせよう）

そう決めたオクタヴィアは、前に足を出した。

『ライセンス』による補助がある為、それだけで風が起こる。

ふっ——！ と、オクタヴィアが力を込めた時、既に彼女の姿は無かった。

「——ッ！？」

物陰に潜んでいたピーターは息を呑むが、彼が動くよりも早く、オクタヴィアは彼の数メートル先に立っていた。

こんな至近距離で撃たれば、それこそ即死だ。

慌てて立ち上がろうとするピーターだが、魔法的な補助も無い彼の足では、『ライセンス』の弾丸から逃げられない。

どうしようも無く、仕方なくピーターは目を瞑った。

それを見たオクタヴィアは一瞬表情を詰ませた後、引き金へと手を添えたのだが——。

瞬間、彼女達の背後にあつた通路が爆発した。

下から何かが衝突してきた、という感じの爆発だ。

二人が驚いてソチラへと視線を走らせると、剣を持った少年が居た。金色に輝く剣を持った少年が、笑みを浮かべていた。

彼は言う。

ただ小さく言う。

「地獄の果てに蹴り落としてさしあげますよ、王女殿」

マジック・ロンシャ 6

第五王女・オクタヴィアは確かにオッド♠フロストの声を聞いた。しかし、オクタヴィアは信じられなかった。

オッド♠フロストの声が、信じられなかった。

『ライセンス』の一撃を受けて、生存してられるハズが無い——
そう、ハズが無いのだ。
それがどういう事だろうか？

オクタヴィアの思惑など完璧に無視し、彼は立っている。
それも、傷一つ無く。

それどころか、笑みまで浮かべて。

オクタヴィアは、自分の視覚がどうにかなってしまったのかと思った。

目の前に広がる光景が、真実だとは思えなかった。

彼女の瞳がオッド♠フロストの手元へと向かった時、彼女は本当に
絶句する事となる。

「それは——、」

見覚えがあつた。

いや、ありすぎた。

王女ともなれば、知っていない方がおかしい。

「まさか——、」

既に封印されたハズの魔剣。
王者が扱った、最強の剣。

「——『エクスカリバー王者の聖剣』!?!」

有り得ない、と自身に言い聞かせていたクセに、彼女の口からその名が出されていた。

それを聞いたオッドは両手で金色の剣を握りなおすと、改めて笑みを作った。

彼は訂正する、王女の言葉を。

「違う。これは『エックスカーリバー英雄の聖剣』——」

説明などいらなかった。

ロンシャの王室に伝わる名だった。

伝承の裏に隠された、『秘密の伝承』に記された言葉だった。

英国王室のみに残った伝承だった。

アーサー王の物語には、後書きがある。

後書き自体は世間に出回らず、英国王室が秘密裏に保管してきていた。

だからこそ、王室関連者以外はその存在を知らない。

そして、その後書きに記されていた言葉が――。

『聖剣は『王者の聖剣』^{エクスカリバー}から『英雄の聖剣』^{エクスカリバー}へと名を変え、魔法の歴史の中でも最高の実力を持つ者の手へと渡るであろう』――。

オクタヴィアは息を呑む。

まさか、うそだ、ありえない、しかし、――一瞬にして、オクタヴィアの頭の中で考えが交差しては消えていった。

彼女は首を振る。

否定の為の物ではない。

精神に対する安定の為の物だ。

彼女は思う。

『英雄の聖剣』^{エクスカリバー}を手にするのは、歴史の中でも最高の力を持った魔法士だという事、そしてそんな凄腕が相手なら、絶対に敵わないという事を。

だが、構わない。

自分の為でもあるし、何よりも魔法業界を良い方向へと導く為には、誰が相手だろうと立ち向かってみせる。

『アンチウェーブ』と協力する事によって、魔法の業界に揺さぶりを掛ける――その揺さぶりを利用して、魔法業界にある全ての殺し合いを終わらせるのがオクタヴィアの目的でもあった。

自分を手駒として扱うような、腐敗しきった魔法業界の黒さを無くす。

誰も利用されないような、誰も生贄にならないような、そんな世界を作り上げる。

王女として、一国のお偉いさんとして、変えなくてはならない。

変える力を持っているのだから、動かなくてはならない。

オクタヴィアは奥歯を噛み締めた。

引き下がれない、絶対に潰す。

『ライセンス』を構え、標準をオッドに合わせる。

マジックビット
魔欠片が周囲に放射され、鮮やかな閃光で部屋を満たした。

オッドは倒れていたピーターを後ろへと移動させながら、それを見ていた。

発射がいつなのか、どう来るのか、一々警戒しないといけない。

三秒程かけてから、ソレは来た。

目に見えない衝撃が、空気を切り裂いていく。

通常の間人ならこれを察知する事は出来ないだろうが、潜在能力を、引き出したオッドは別だ。

『ライセンス』の発射を察知したオッドはピーターを後方へと投げる。

オクタヴィアとの戦いで意識が薄れているせいか、ピーターは特に反応を示さなかった。

改めて前方を向いたオッドは、『エックスカーリバ 英雄の聖剣』を構えた。

二つの行動が有した時間、僅か三秒。

『エックスカーリバ英雄の聖剣』が振るわれ、黄金色の衝撃波が飛んだ。
いや、そう視認出来た者はいなかっただろう。

黄金色の衝撃波は、人の視界では捉えられない程の速度で動いたのだから。

空中で、何かが激突した。

金属同士をぶつけたような、不快な音が響く。

四方八方へと衝撃が襲い掛かり、無関係な物まで傷付けていく。
だが、二人はそれだけでは止まらない。

『エックスカーリバ英雄の聖剣』を構えたオッドが弾かれたように駆け、オクタヴィアとの距離を一気に縮める。
いや、もはや『駆け』という次元ではない。『転移』といっても過言では無い速度だ。

対するオクタヴィアは、『ライセンス』の補助によって大幅に強化された身体能力を使い、真正面からオッドへと衝突していく。

オクタヴィアの手にある『ライセンス』のハンマーが二回押し上げられ、衝撃が巻き起こる。

風が武器となり、オッドの体を潰そうとしているのだ。

恐らく、『ライセンス』のハンマーを上げる事によって起動する魔

法だろう。

オクタヴィアは勝ちを確信していた。

風の武器を連続発射すれば、さすがにオッドも潰れると考えていた。

だが、オッドはそういった考えを根本から破壊する。

正面から迫る風の武器——オッドを切り裂こうとする、ふうとう風刀は
部屋の隅から隅まで広がっており、さながら壁のようだ。

それでも、オッドは臆さない。

彼が構えた『英雄の聖剣』エックスカーリバは何もしていない。
そう、何もしていないのだ。

風刀と真正面から衝撃波がぶつかる。

衝撃波が散らしたと思わしき赤色の閃光が部屋を満たした。
雷撃のような動きをする閃光が辺りへと放たれていく。

攻撃を避ける為に、オクタヴィアはマジックシート魔欠片を使った防壁を周囲に張
る。

万全な体制を築き上げているハズなのに、それでもオクタヴィアは
自分を庇うように両手を構えてしまった。

光が爆発する。

オクタヴィアは、そこで見た。
オッドの手元を。

彼女の顔が一瞬にして驚愕へと変わる。

（——なっ！？ 『英雄の聖剣』^{エックスカーリバ}を使っていない！？）

そうなのだ。オッドは『英雄の聖剣』^{エックスカーリバ}を使っていなかった。
『英雄の聖剣』^{エックスカーリバ}はだらしなく下を向いており、構えられていない。

では、何が……？ と、オクタヴィアはオッドを見つめる。

彼の表情を見る限り、本人も目の前の光景に驚いているようだった。
彼は思う。

（——『英雄の聖剣』^{エックスカーリバ}を振る暇が無かったから、ヤケクソ気味に魔法を放ったけど……まさか、ここまでの威力を叩き出すなんて……あの魔法は。微弱な電撃を放つ程度の物だったハズんだけどなあ……『聖杯』^{ホーリーク}の言っていた事は、どうやら本当みたいだ）

思うオッドに対し、オクタヴィアは全身を震わせていた。
ようやく思い知った。

コレが『実力者』なのだと。
アーサー王に認められた者の力なのだと。
これだけの魔法を制御し、それでも苦にしない。

——もはや、魔卿並だ。

オクタヴィアの戦意は、完全に失われていた。

魔法を知る者にとって、オッドの実力はそういった領域に達していたのだ。

立ち向かう事自体がおかしいという、『最強』の域にオッドは達していた。

風刀が消える。

赤き雷撃がオクタヴィアへと射出された。

彼女が慌てて『ライセンス』を構えなおすが、間に合わない。

凄まじい雷音と共に、オクタヴィアの体が部屋の奥へと消えた。

マジック・ロンシャ 7

第五王女・オクタヴィアは粉塵立ち込める部屋の奥に倒れていた。倒れていた、というよりも尻餅を付いている、といった方が適切かもしれない。

『ライセンス』の補助があつたおかげか、彼女は尻餅を付く程度で終わったのだ。

肩の辺りに酷い痛みが走っているが、逆に言えばそれだけなのである。

もはや神話クラスに達してしまっている攻撃を受けて、死んでいない事が既にもう奇跡なのである。

痛みから来る呻きを漏らしてはいるが、それだけで済んでいる。

彼女の手の中にあつた『ライセンス』は吹き飛ばされ、遠くに転がっているが、彼女自身は死んでいない。

第五王女・オクタヴィアはそういった状況を怪訝に思った。

生きている、という事を感謝するのではなく、疑つたのだ。

敵を潰すのは戦の基本中の基本。だというのに、何故自分は生きている。

そこで、ようやく知った。第二王女・クリステイーナが何故、オツド・フロストに『アンチウェーブ』討伐を依頼したのか。

任せられるような人材だったからだ。並みの戦士ではない。もっと、

内面的な所で他の戦士と違う部分がある。

彼女はそれを知って、薄く笑った。

粉塵のカーテンに——灰色のカーテンに隠され、誰にも見えないで
あろう笑みを零した。

分かった気がした。

自分に何が足りないのかを。どうして自分が交渉手段にされてしま
う程、人望が薄かったのか。

無理に決まっていた。

あんな少年の真似は、出来ない。

だからこそ、自分は囷にされたのだろう——足りていなかったから。
あの少年のような事が出来ないから。オッド人格的に、オクタヴィアは負
けていた。

もちろん、こんなのはただの自嘲だ。

オクタヴィアはそれを分かっている。

いや、分かれなかった。

自分をただ貶す事しか出来なかった。

いつの頃からだろうか。

こんな風になってしまったのは。

英国王女として、デュランダーナを操る術を持つ者として、様々な
『交渉』に巻き込まれたせいかもしれない。

汚い思惑の交差に巻き込まれたせいかもしれない。

とにかく、オクタヴィアは自分を認められなかった。ただ、認められなかったのだ。

それをようやく知って、オクタヴィアは漏らしていたのだ。大した意味は無い、単なる『自嘲』の笑みを。

オクタヴィアの心の中は、解放感に包まれていた。何も変わってはいない。自分はロンシャとフレンプの交渉を円滑に進める為の罫のままで。

それでも、確かな解放感があつた。

おかしい事だ、と自分でも思う。

何も変わっていないのに、それだというのに——何でも、気分が良いのだろうか？

「は、は——はははっ」

静かに笑っていた。

灰色のカーテンが、——粉塵のカーテンが織り成す音に吞まれた笑い声は、誰にも届かない。

いや、——自身には届いていた。

ひたすら孤独に生きてきたハズの自分が、ようやく心から笑っていた。

驚かなかった。不思議な事に、驚きは無かった。

ずっと望んでいたのかもしれない。
ずっと夢見ていたのかもしれない。

それこそ、メルヘンに満ちた幼い子供のように。汚い大人たちの思想から逃れる事を望んでいたのかもしれない。

だが、彼女の思考はガチリ、——という小さな音によって遮られる。冷やかな感触が、後頭部の辺りにあった。

そして、声は遅れてやって来る。

「動かないでもらおうか」

聞き慣れた声であった。

一時的とはいえ、自分の部下でもあった少年だ。

「——どういふつもりなの？ マーク」

「分からないか？ お前は用済みという事だよ、夢見がちな王女さん」

オクタヴィアの表情から、一瞬にして笑みが失われた。
先程までの希望はどこにもない。

だが、彼女は一切口調を変えずに言う。

「——『アンチウェーブ』は力を持つバックがいないと行動できない。私を切り離せば、不利益を被る。『アンチウェーブ』のリーダーや、ナット・ジェースだってそれは理解できている」

「——残念だ。既にそこから間違っているとはな」

「……、？」

「力を持つバックが必要、だと？ そんなものはナット・ジェースで充分補っている。いや、それどころか足りすぎているぐらいだな。もう一度、お前の存在意義を確かめてみる」

そう言われて、初めて気付いた。

——デュランダーナ。

自分の存在価値はそれしか無い。

王室からも、側近からもそういつた目でしか見られていない。

心の中に張り巡らされていた嫌な感情が外に溢れ出していく。
もう、嫌だった。

「『アンチウェーブ』に不足しているのは、戦力だ。電波業界と魔法業界、それどころか各国を敵に回してまで『改革』を成功させるには、戦力が不足しているのだ」

利用されるのは、懲り懲りだった。

「お前の存在意義はそれしかない。もう、分かっているだろう？」

オクタヴィアは、デュランダーナを手放してしまっている。

『アンチウェーブ』はオクタヴィアからデュランダーナを奪うつもりでいたのだろう。

「——手に入れても、使う手段は無いでしょ……？」

「何を言っている。だから戦力が不足していると言っているのだ」

——分からないか？ 人間は己の『印』を変更できない。 なら、話は簡単だ——お前の戦闘データを採取し、そこから『印』のパターンを計測すればいい」

「何を、言つて——」

「分からないか？ その計測パターンを人間以外の生物に実現させれば良いんだ」

そこまで言われて、オクタヴィアはハツとした。
目を見開き、絶叫する。

「『悪魔制御解放！』！』」

音量が大きすぎたせいか、灰色のカーテンの中でピーターを搜索していたオッドが立ち止まった。

その気配は、オクタヴィアでも分かった。

それでも、構わない。

この驚愕を抑えろ、という方が無理難題だ。

「ようやく気付いたか。『印』を悪魔に再現させ、人間にもそれを当てはめてもらえばデランダーナを扱える。お前は考えるべきだったな。『アンチウエーブ』が『悪魔制御解放』マシク・リモコンを狙っている理由を」

オクタヴィアは否定する。

ここで『アンチウエーブ』という居場所を失えば、今度こそオクタヴィアは囷のままだ。

世界を浄化する、という夢も叶わなくなってしまう。

汚い思惑が交差するこの世界を、綺麗にするという夢も叶わなくなる。

力を持った者の勝手な行動に巻き込まれていく弱者を救い出せなくなってしまう。

二重の意味で、オクタヴィアは錯乱していた。

それでも、彼女は否定材料を探す。

「ロンシャの政治と通じる私とのコネがあれば、『アンチウエーブ』も有利に——」

「そう言つと思った。だが、思い出してみる。お前の目的を」
問われるまでもない。

簡単だ。

「囹からの解放」、「世界の浄化」。これだけだ。

「このままお前を『アンチウェーブ』に置いておくと、内側から破壊されかねないしな。お前の利害とは正反対の事を起こす訳だし」

「——ま、さか」

「そうだ。俺達はロンシャに総力戦を仕掛ける。そこからEUを掻き乱す。このまま行っても、アメロッパは落とせないしな」

思わず、オクタヴィアはマークの胸倉を掴んでいた。彼の右手にある最新式の拳銃など無視して。

「ほらな、『アンチウェーブ』の睨んだ通りだ。さて、問題だ。地上に流れている『アンチウェーブ』の極悪非道な噂とは、何だ？」

「まさか——本当なのか！？ やったのかッ！？ 本当に、人間をモルモット代わりにしているのか！？」

思わず絶叫していた。

噂なら、幾らでも聞いていた。

だが、オクタヴィア自身は「単なる噂」、だと切り捨て、まともに耳にはいれていなかった。

——各国の孤児院から子供を買い取り、『魔法実験』を施しているのだ。

「知っているか？ 第五王女。孤児院っていうのはな、『ザ・フアイブ・ワールド・ウェーブ・バトル』以降、酷い境遇なんだよ。何だって、戦争当時に孤児院に収容されていた孤児達が『自由』や『人権』やらを求めて反乱を起こしたらしいしな。混乱に乗じたいぞこざだ。だから、あれから五〇年もの間差別を受けている訳だ。当然だろ？ 五〇年前の戦争後、人間という生き物は通常の何倍も疑い深くなっただけだからな」

マークは浅い息を吐いた。

「そういう差別を受けていると、経営も結構困難になってくる。国の方も『裏の面』では孤児院に対して差別意識を持っているしな。金を中々回してこない。となると、『厄介』の元である孤児を追いつめようとする孤児院も出てくる。当然、追いつめようとする孤児院——『アンチウェーブ』はそういった孤児院を回って、子供を買い取っている。勿論、子供を売る孤児院なんて極少数だ。

だが、売り出たくない孤児院でも、もう疲れているのは確かだろうな。もう、この世界に疲れているんだよ。だから、『アンチウェーブ』も仕事をやりやすい。五〇年前の戦争はそれだけ深い爪痕を残していったんだよ。勿論、そんな世界を変えるのは俺達だな」

瞬間、鈍い音が炸裂した。

マークの右頬が、殴られた音だった。

マークは疲労したような表情を浮かべる。

「……ほらな。お前を『アンチウェーブ』に置いておくと、必ずこういった事がバれていた。内部から破壊されるよりは、外部から妨害される方がマシだからな。お前はここで切り捨てる」

ここで、新たな物音が発生した。

それは足音だった。

正確に言うなら、粉塵のカーテンの中から現れたオッド・フロストの足音だった。

オッドはオクタヴィアとマークを見て驚いていたが、オクタヴィアがマークに殴り掛かっているのを見ると、すぐさま戦闘態勢に切り替わった。

「……。僕が戦うべきなのは、どちらだ……？」

悩んだように呻き声を漏らすオッドは、ポケットの中からコインを取り出した。

そこに書かれていた文字は単純な物である。

『第五王女を手助けせよ』——そういった旨の物だった。

オッドは剣を構える事なく、ただ戦闘の構えを取っていた。

彼の周囲を、魔欠片^{マジックピース}で構成されたアーマーが包む。

アーマー、といっても目に見えず、透明な防壁のような物だ。

当然、本人も意図的にそういった物を築き上げている訳ではない。

練られた魔欠片^{マジックピース}が、自動的に防壁を築き上げている。

それを見たマークは、空中から一枚の紙切れを取り出した。

そこに書かれていたのは、簡素なギリシャ文字。

ただし、マークが呟いたのは更に簡素な英語だった。

「放置」

バンッ！と、マークの姿が消えた。

それと同時に、部屋の奥——堅い扉に閉ざされた『最深部』から、爆発音が聞こえた。

飛び出そうとするオッドを、オクタヴィアが片手で制する。

「——行かなくていい。今更行っても、間に合わないから」

「――。何があつたんですか、一体」

オクタヴィアに制されたオッドは、肩の力を抜く。

それでも、戦った経験からか、彼の体は若干戦闘態勢を取っていた。本能が自動的にオクタヴィアを警戒しているのだ。

「詳しい事情は後で送る。 コチラのハンターの番号を覚えておくから、後で連絡を入れてくれ。 今は『アンチウェーブ』の妨害が先だから」

「分かりました。――『アンチウェーブ』の妨害、ですか」

「……どうも、近々『アンチウェーブ』はロンシャに攻撃を仕掛けるつもりでいるらしい。

コチラは英国政府内で情報を収集する。 ソチラは、ニホンのコダマシティに向かって」

「――セイドですね」

「――マークから聞いたみたいね。 それなら話は早い――私は政府から出れない、そっちは政府に入れない。 だから、互いにしか出来ない事をやろう」

オッドはそれを聞いて、静かに笑みを零した。

「ニホン、か……」

その前に、ピーターの回収を済まさなくてはならない。

ロンシャ塔から出る為、そして『ライセンス』をバッキンガム宮殿に返す為に出口方面へと向かっていくオクタヴィアとは正反対の方
向へ、オッドは足を進める。
互いに、振り返らなかった。
目的は決まっているからだ。

—— 各々の目的を持った者達は、次第に交差していく。 ——

224×年、『星流小学校』に秋が訪れた。
そんな中、六年生のオベラは頭を抱える。

彼の目の前にあるのは、問題集——つまり、授業で提出された本である。

これを下校までに提出しなければ、冬休みが地獄となるに違いない。

そこまで考え、オベラは髪をわしゃわしゃ——と掻いた。

実はオベラ、勉強が苦手である。

「あ——っ！ も——っ！！ あの糞教師、いつその事ぶん殴ってやるのか？……授業するのが面倒だからって、問題集押し付けやがって……」

傍目から見れば、「何だか頭のおかしくなった子」状態に突入したオベラは、もう止まらない。

ウェーブバトルやウィルスバスティングの授業では高成績を誇り、学校一とも呼ばれるオベラのだが……融通の効かない部分もある。

「なあ——」

『断る』

ウィザード——ミハイルから一刀両断され、オベラの気持ちは沈む。
オベラのは金髪は、輝きを失っていた。
まるで主人の感情を移すかのよう。

「あああああああつあああつあああつあああ」

正気を失ったオペラに訪れるのは、『発狂』という二文字。
シヨックにやられ、もはや目に生氣は宿っていない。

ミハイルはそれを呆れたように見つめ、ハンターの中で陽気にデーターをいじくる。

オペラが罵った『糞教師』、赤髪のジユバは歴史と数学に長けている。

16歳にして、『星流小学校』の算数を担当している事から、その異例さを伺える。

「……何なんだ、これは」

ジユバの目線の先にあるのは、ハンターのエアディスプレイ。
そこに映るのは、最近発掘された古代文章である。

現代の知識では解明できない内容であり、世界中の研究者はお手上げである。

ジユバは歴史や古学に長けており、かなり有名な研究者でもあるのだが——だからこそ、この文章に引っ掛かるモノがあった。

世界中の者がお手上げ状態のこの文章に、何かを見出していた。

「……何だか、ここから周波数を感じる気もするんだがなあ……」

電波変換可能な彼ならではのコメントだ。

そんな中、ハンターが鳴った。

第二のディスプレイに表示されるのは、校長の名前だ。

溜息を付きながらも、ジュバは応じる。

「……はい」

『あー……君か。 オベラをスカウトしようと思うのでな……誘導を頼む』

言うなり、通信を切断した。

ジュバは再びディスプレイと向き合い、更なる溜息を付く。

この学校が裏で汚い真似をしているのは知っている。

だが、ジュバはこの学校から離れる訳にはいかない。

貴重な戦力を持った電波人間達——そして、政府からの手助けによって繰り返される人体実験。

それらに対して、研究を行わない訳にはいかない。

自分でも自分に嫌悪してしまうのだが、ジュバにとっては研究が第一なのだ。

人命は二の次という、正に研究命な人間がこのジュバであった。

さて、噂のオペラである。

『問題集』という強敵に出くわしたオペラは、絶賛発狂中であつた。だが、負ける訳にはいかない。

冬休みを存分に楽しむため、これを宿題にする訳にはいかないのだ。生徒たちのパラダイスである冬休みは、オペラにとってもパラダイスである。

そのパラダイスを満喫する為には、どんな事だつてするのだ。

決意を固めたオペラは、ロボットですら驚くような硬直移動で起き上がる。

静かに問題集の表紙をめくり、そして絶叫した。

何故なら、問題集の表紙をめくつた先にあつたのは、訳の分からない記号だつたからである。

最初から算数の式が書かれており、わざわざ式を立てる必要がない……という親切設計だつたのだが、オペラにとっては未知の世界が紙面一杯に広がっているようにしか見えない。

ミハイルも呆れ返っているようで、『俺知らん』といった様子で読書に勤しんでいる。

これは大ピンチだ。

オペラにとって、冬休みが奪われるのは命が奪われることと等しい。そして、悩み続ける事数分——新たな答えを導く。

オペラが導き出したのは、『適当に数字を並べて提出すれば、正解

とか関係なしに終わるんじゃない……』という、低脳爆発なモノである。要するに、「点数とかどうでもいいから、提出すれば勝ちだ!!」状態である。

適当な数字を並べて、全問不正解だった場合——冬休み丸ごと補習という、想像を絶する地獄が待ち受ける訳だが……オペラはその可能性を視野に入れていない。

せっせと鉛筆を取り出すと、適当な数字を並べていく。

手の動きは、訳の分からない速さとなっている。

冬休みへと執念が、手の速度を速めていく——正に超人。

オペラはウェーブバトルだけでなく、課題の頂点にも立った。

相変わらず、ミハイルからの視線は冷たい。

「おつ、オペラ。 問題集か」

肩に手を掛けられ、オペラはゆっくりと顔を上げた。

オペラが所属する6-C組……このクラスは、学校内でもトップクラスと呼ばれる者の多くが所属している。

戦闘面ではエリート揃いのクラスなのだが——オペラのように、頭の弱い生徒も多い。

「少し、息抜きしようぜ。 今日自由時間が三十分あるしな」

自由時間……『星流小学校』独特の時間だ。

毎日、決められた時間、自由に過ごす事が出来る。

オペラの場合はこれを問題集に当てていた訳だが——。

「……まあ、昼にも自由時間があるしな……いいぜ、俺も行く」

楽しそうな事には簡単に流されてしまおうオベラなのであった。

「宇宙神話……、か」

ビクトリーと呼ばれる、研究では自分の右腕のような存在にメールを送信したのだが――。

「周波数を感じる」という内容の本文を送ったのが正解だったのだろう。

文章は電波文字と呼ばれる、宇宙に生きる電波生命体共通の言語で書かれていた。

「……調べてみる価値はありそうだな」

『宇宙神話』、などという単語は聞いた事が無かった。

研究心を非常にくすぐられるが、今は教師としての仕事の方が大事だ。

書類を脇に退かすと、エアディスプレイに目を通す。

冬休みが近づいている事もあり、成績のまとめ上げが大変なのだ。

オベラの件に関しては、とある人に任せてある。

最も、あのクソガキの事だから……そう簡単には上手くいくとは思

えないが。

そんな事を思いながら、成績のまとめ上げを高速で行っていく。

オペラを息抜きに誘ったのは、オペラと同じトップクラスの人間だった。

最も、トップはトップでも全生徒のトップに立つオペラとは、実力の差がありすぎるのだが。

「んで、どこに行くんだよ？」

「まあまあ、着いて来いよ」

そう言いながら目の前を歩いていく、一生徒。

この生徒、オペラとは結構な仲である。

というより、生徒の中ではオペラと最も親密だったりする。

「ほら、ここだよ。ここ」

そんな彼が指差したのは、堅く閉ざされた黒い扉だった。

オペラはそれを見て、一つの都市伝説を思い出す。

「開かずの……扉……」

二十年に渡って語り継がれる、『星流小学校』の都市伝説。誰も開いた所を見た事が無く、鍵が何重にもかかったこの扉は、様々な怪談に取り入れられている。

夜な夜な泣き声がくだとか、そういった類だ。

「そうそう、今から面白いモノ見せてやるよ」

そう言つて、彼が取り出したのはハンターだ。

エアディスプレイを出現させ、何やら遠隔操作を行っている。

数十秒ほど経つてから、不意にガコツという音が響いた。

それも、扉の向こうからだ。

都市伝説といった類のモノは笑い飛ばすオベラだが、これはビビらずにはいられない。

最悪、チビツてしまう。

それはいけない。

男としてはあるまじき行為だ。

「ほらよ」

生徒が咄くと同時に、扉が向こう側に開いた。

オベラはビクビクとしながらも、向こう側を覗き込む。

真っ暗闇で、何も見えない。

と思つたら、不意に背後から衝撃が加わった。

思わず扉の向こうに踏み込んでしまい、生徒もその中に踏み込む。

それと同時に扉が閉じられ、照明という照明が輝いた。

だが、驚くのはそこじゃない。

暗闇から光に照らされ、目を眩ませている場合でもない。

「なんだよ……これ……ッ!？」

部屋の中に広がるのは、おぞましい光景だった。複数のカプセルが壁に沿って並べられ、中に入っているのは人間の内臓と死体である。

入り口付近には二台の金属ベッドが並べられ、何やらノコギリのようなモノがベッドの上に置いてある。

更にショッキングなのが、ノコギリに付着した血と、人間のモノかもしれない肉の破片だ。

思わず吐きそうになったオペラだが、腹部に走った痛みによって吹き飛ばされる。

吹き飛ばされた、といってもメートル程度なのだが。

殴られた、と気付いたのは、生徒がニヤニヤと笑みを投げかけてきた時だった。

「ま、俺がお前の誘導役になったのも頷けるわ。お前は俺に絶対的な信頼を抱いてるもん——校長先生、連れてきました」

茫然としているオペラにそう投げかけた生徒は、部屋の奥に向かって最後に呟く。

オペラがそちらを向くまでも無かった。

コツ、コツ——という足音と共に、聞き慣れた声が飛んできたからだ。

「そうか……ご苦労だったな」

「校、長……！？」

オペラの呟きに答える者はいない。

生徒は脇に退くと、校長をそこに立たせた。
倒れたオベラを見下ろし、校長は笑みを浮かべる。

「交渉しないかね？」

「そ、れより、も……説、明……しろ……こ、れは、何なんだ？」

先程殴られた箇所が痛むのだが、それすらも無視して問う。

校長はそれを聞くと、腕を広げて見せた。

まるで、自慢するかのように。

「我が星流小学校の人体実験場だ。 どうだ？ 素晴らしいだろう？」

状況が理解できない。

オベラの脳内は、それしかなかった。

校長の隣にいる生徒の笑顔も、自分を見下ろす校長も、何もかもが分からない。

「君を、私達の仲間にしようと思うんだ」

どういう意味か、最初は分からなかった。

だが、目の端に映ったカプセルを見ると同時に、そういった感情は消し飛ぶ。

「死体じゃ……な、い！？」

そこにあつたのは、カプセルの中で瞬きする人間だった。オペラの驚愕に対し、校長は答えない。

星流小学校の闇が、辺り一面にぶちまけられたこの部屋。その中で、オペラは息を呑む。

「君を私達の仲間にしようと思う。無論、断ればカプセルの中に入る事となるぞ。ほれ、契約書だ」

校長が呟くと同時に、オペラのハンターがピロリン、といった場違いな音を鳴らす。

オペラが転送された『契約書』とやらを見てみれば、そこに書かれていたのは驚愕の事実だった。

『国家的秘密組織』と呼ばれモノの一つが、この小学校だという事。政府の仕組み、この学校がどういった任務を行うのか……。

校長の隣に立つ生徒も、こういったおぞましい任務を遂行してきた。そう考えると、吐きそうになるオペラだった。

「さあ、行こうではないか。我々は君を欲している……君の实力は、物凄い価値があるのだよ」

問われたオペラは、一度カプセルに目を移す。

ここで拒否を選択すれば、トップクラスの生徒一人だけでなく、『星流小学校』の闇に位置する人間から命を狙われるハメになるだろう。

だが――。

更にもう一度、カプセルに目を移した。

オベラのクラスでは、三人の転校生が出た。

もしもそれらが、全員星流小学校の被害に遭ったものならば――。

いや、それどころではない。

星流小学校の全生徒の中から、何人の人が被害に遭ったのだろうか？

そこまで考えて、生徒に目を移した。

親友とも呼べるに等しかった存在。

ミハイルと同じく、信頼できる存在だった。

もしもこうして、何度も裏切られるなら――。

答えは決まっていた。

被害に遭った人達の為、自分を裏切った生徒に一泡吹かせる為、星流小学校を潰すため――。

「トランスコードオオ!! ミカエル!!」

クソつたれな政府や世界と、戦うと決めたのだから――。

電波変換特有の光が溢れると同時に、堅く閉ざされていたハズの扉が開いた。

オベラが電波変換した事により、待機していたトップクラスの人間達が、パスコードを使って扉を開いたのだろう。

校長は小声で指示を出すと、そそくさと奥に向かってしまう。

オベラはそちらの方向を見たが、弾丸が飛んだ事により視線を戻す。

いくら学校内で最強の実力を誇るオベラとはいえど、三十人ものトップクラスを相手には出来ない。
降参しろ、といった声も響く。

だが、オベラは動いた。

金色のアーマーを前方へと動かし、空気中の風を掌握する。
ミハエルに搭載された能力——空気中に漂う電波を、ミクロ単位まで操れるのだ。

その為、空気中に漂う電波を操作する事によって、風を作り出す事も出来る。

鎌のように鋭い風が、生徒の首へと飛ぶ。

「チッ——スーパーバリア——」

五重のバリアが風と衝突した。
ギリッ、という音と同時に、二重のバリアが碎ける。

三重のバリアと風が、辺りに衝撃波を散らした。

だが、オペラは止まらない。

トップクラスの集団に真正面から飛び込み、ブレイクソードを構える。

己の周波数をソードに流し込み、常人では考えられないほどの力を生み出す。

そのまま装甲を纏ったトップクラスの体を斬り、地面に倒す。

これが、オペラの実力だった。

空気中の電波を操るだけでなく、己の周波数をも自在に操る。それを以ってして相手を粉碎し、圧倒的な実力を見せ付ける。

常人では追いつけない、正に天使と名付けるに相応しい実力だ。

オペラの周波数を流し込まれ、ブレイクソードも金色に輝く。

もはや『砕くソード』であるブレイクソードの面影は無かった。

普通のソード並みに——いや、それよりもしなやかにブレイクソードが動く。

オペラの手先のように……体の一部分であるかのように、ただ敵を粉碎していく。

これが、ミハエルとオペラが合わさったミカエルの力だ。

「集団の波を使えば、それに抗う事も出来ない！潰せ——！」

生徒の言葉と同時に、トップクラスの者が動く。
散り散りになっていたというのに、急激に連携を取り出す——数箇

所に固まり、そこから一斉に攻撃を打ち込んでいるのだ。

それを見たミカエルは舌打ちすると、ヘルメットに手を伸ばした。赤いバイザーが、不気味に輝く。

「……ッ」

ゴキリ、とミカエルのヘルメットから不吉な音が聞こえた。それと同時に、ミカエルの周囲に電波の粒子が張り巡らされ、見えない壁を作り上げる。

集団側からすれば、己の攻撃がミカエルに近づくこと無く、反射されてるように見えるであろう。

動揺する集団だが、遠距離攻撃が効かないと見ると、すぐさま剣による攻撃へと移行する。

三十人近くの人数が、一斉に剣を構えて突進する。

その渦中の中で、ミカエルは一切動じなかった。

「弾ける（・・・）」

たったそれだけ。

小さく呟くと同時に、事は起こった。

ミカエルを斬ろうとした集団が、まとめて吹っ飛ばされる。

ミカエルはそれを見て、ただ殺気を放っただけだった。

ミカエルの中で、何かが爆発していた。

非人道的な実験に対してか、裏切り者に対してか——何に対して怒

りをぶつけているかは分からない。

ただ、これだけは分かるのだ。

この怒りは、星流小学校を中心として構築されている。

星流小学校こそがミカエルを怒らせる原因であり、中心でもあるのだ。

吹き飛ばされた者達に対して、ただミカエルは投げかける。

「俺の能力の一つとして、「電波」そのものを掌握出来るモノがある——いや、正確に言うのだな……これは能力じゃない。己の周波数を繊細に操れるだけの力があるからこそ、「実力」なんだよ」

わざわざ説明を加えたミカエルは、ただ生徒へと向かっていく。自分が最も信じていた、人間へと。

「……俺を倒して、学校内トップの称号を勝ち取ろうとしたんだろ？ お前はいつもウェーブバトルの事しか考えてなかったからな」

そこまで言っつて、ミカエルはフツと笑って見せた。虚無から来る、悲しみを漂わせる笑みを。

「……こんな事になるなら、俺……学校内トップになりたくなかった……」

純粹な言葉だった。

目の前の生徒が、自分の事を友達だと思っていなくてもいい。だが、学校内トップにさえ立たなければ、この生徒と敵対しなくても済んだ……その考えだけが、ミカエルを支配する。

「じゃあ、な……俺のブラザー」

ブレイクソードが——金色の剣が、振り下ろされる。実験台となって散っていった人々と同じく、血を散らして。情けなど掛けられなかった。

綺麗事など存在しなかった。

裏切られた事によって、オペラの精神は崩れた。

星流小学校という初めての居場所を奪われ、オペラの精神は死んだ。

孤児院で過ごしてきたミカエルにとっての居場所、それがここだった。

この学校だった。

孤児院から出所し、政府からの手助けで一人暮らしをしていたオペラにとって、信頼出来る者はあの生徒とミハイルしかいなかった。

孤独だったオペラのブラザーは、あの生徒しかいなかった。

それを、たった数十分で壊された。

その事実だけで、オペラの精神は崩れ、そして死んだ。
二度と元に戻る事は無い。

精神が死んだ事により、オペラは殺しをした。
何の躊躇も無く、自然と。

今日、星流小学校による犠牲者が、また増えた――。
精神的にも、肉体的にも。

「……くそっ！」

校長が吐き捨てた先にあるのは、一つの死体と廊下の壁に開いた穴。穴は人が通れるぐらいの大きさがあり、恐らくそこからミカエルは逃亡したのだろう。

校長は盛大に舌打ちした後、気絶している生徒を金属ベッドに寝かせる。

優しさから来る行為なのではない。

任務に失敗した生徒を、実験台にする為に寝かせたのだ。

オペラと親密な関係にあった生徒の亡骸をそこに押し込めた後、校長はノコギリを握る。

扉を閉ざし、叫び声が聞こえないよう防音膜をリアルウェーブによって作り出す。

「久方振りの実験だ」

「……無理だな、これは」

成績をまとめ終わった後、ジユバは呟いた。

目線の先にあるのは、研究所から届いた報告データ。
ジユバは深い溜息を付くと、メールを打ち込んだ。

校長へと届けられるハズのメールを眺めた後、荷物をまとめる。
茶色いコートを着ると、教員室を見渡した。

恐らく、ここに戻る事は無いだろう。

元々、ここに来た理由は「実験結果を研究する」為。

実験研究よりも興味のある研究が出来てしまえば、もはや留まる理由は無くなる。

「……宇宙神話、か……。面白い研究課題が出来たものだ」

研究命なこの科学者は、止まらない。

ミカエルはウェーブロードにいた。
目線の先にあるのは、一つの孤児院。
子供達が、しきりに出入りしている。

「……『アレット孤児院』とも、お別れだな……」

今まで、ちよくちよく孤児院には出向いていた。
大していい思い出がある訳でも無いのだが、自分を育ててくれた者
への顔見せはしなければならない。
だが、もうそれは終わりだ。

自宅の方は今頃、『星流小学校』が政府の者によって壊されている
だろう。

いや、焼いている可能性もある。

それに、待ち伏せしている者がいる可能性もあるのだ。

だから、あそこには戻れない。

しばらく孤児院を眺めた後、ミカエルはその場に背を向ける。

「……これまでの日々とはオサラバだ。俺は、世界に羽ばたく」

場所はアメロツパへと移る。

約50年前に暗躍したギャラクシーとその一行——テロッド、カストル、ノート、ソールだ。テロッドは約50年前にはいなかったが——は調査の為、アメロツパへ訪れていた。

計画を実行へと移す為の前準備。

それら全てを整えておかねばならぬだ。

約50年前も、きつちりと前準備をしていたハズなのに失敗した。

だからこそ、ギャラクシーは慎重に慎重を重ねている。

アメロツパは基本、賑やかな場所であるのだが——ギャラクシー達がいる場所は、それとはかけ離れていた。

辺り一面に広がる草むら。

そして、誰もいない。

約50年前に繰り広げられた『ザ・ファイブ・ウェーブ・バトル』。ここは、アメロツパとシャードが交戦した場所なのだ。

激戦を繰り広げた先にあつたのは、双方撤退という結末。

だが、被害は馬鹿にならなかった。

建物は全壊し、街は崩壊——。

それ以来、放置されてきたこの場所は草に支配される事となる。

そして、得体の知れない戦争が繰り広げられた場所というだけあり、

不気味がつて人が近づかない。

そんな中を、ギャラクシー達は突き進んでいく。

『うむ、……中々いいぞ。経過も順調だ。このまま行けば、利用する事が出来る』

「うっは、すげえ」

『……警戒心を少しはだな……』

ミカエルは既にミハイルの言う事など聞いていない。
彼らはスカイウェーブを通り、アメロツパまで来ているのだが――
大分前に、面倒くさい手続きは済ませてある――。

ミカエルにとって、アメロツパとは憧れの場所であった。
念願の場所であり、栄光の場所である。

世界の中心地といっても過言ではないアメロツパ。
元々、世界に興味のあったミカエルにとって、これは憧れである。

その憧れの土地へと突入し、ミカエルの心は浮かれているのだ。
ちなみに、手続きは事前に済ませてある理由なのだが……。
既に星流小学校での一件から、三週間が経過している。

その間、アメロッパ行きの手続きを済ませたミカエルは隠れ家——
要するに、空き巣である——に潜んでいた。

どうせ逃亡するなら、念願のアメロッパに行った方がいいという結論に達したのだろう。

そして、それを見た『星流小学校』と政府側は追跡を断念。
オペラの追跡を、正式にやめる事としたのだ。

つまり、晴れてオペラは自由の身。

だが、念願の場所に到着したのにそのまま帰るのはもったいない。

最低、一ヶ月は滞在するつもりである。

どうやって食物のやり取りをするか……アルバイトである。

小学生六年生からアルバイト可能になったアメロッパ。

条件を満たしているオペラにとって、アルバイトしない手は無い。
事前に翻訳システムもダウンロードしてある。

「さあーてつと！ ん？ 何やら無人空間、が……ッ！？」

ミカエルの視線の先にあるのは、草むら。

最後に言葉を詰まらせたのは、変な集団を見たからである。

集団をウェーブロード上から眺めていたミカエルだが、即座に地上
へと降りていく。

彼が放ったのは、簡単な言葉だった。

「デメエら……何してやがる」

集団から不吉な気配を感じ取ったミカエルは、彼らに対して問う。
天然的な勘や雰囲気察する能力に関して、オベラは異常なまでに
発達していた。

『……………ん？』

ギャラクシーがそれに対し、ゆっくりと振り向いた。
ミカエルの全身を興味深げに眺めた後、張り裂けたような笑みを浮かべる。

『……………ふう、む……………君から感じる殺気、凄まじいな……………。それに、君からは『強さ』を感じる……………そうだ、腕試しとこういうじゃないか。テロッド、相手をしてやれ』

それと同時に、白髪の少年が動いた。

ギャラクシー達よりも前方に走り、電波変換を行う。
単独で電波変換——これからミカエルが導き出したのは、『ウェーブマン』という答えだった。

ギャラクシー達を見れば、『ゼロラグナ』では無いのが分かる。

つまり、……………存在そのものが法に違反する、『単独ウェーブマン』。
犯罪者なのだから、気を許せるハズが無い。

そう結論付けたミカエルの行動は早かった。

ロングソードを構え、テロッドの動きを見切る。
そのままテロッドのいた右に振るうが、テロッドには当たらない。
何故なら、テロッドは一瞬で左に動いていたからだ。

そのまま白い衝撃波が地に衝突する。

煙が立ち込める中、ギャラクシーが鼻で笑った。

『ま、ロングソードを振るっただけでも褒めるべきだな。 テロッ
ドのスピードに着いて来れる者は、中々いないぞ……さて、テロッ
ドの本気は出された事だ。 今頃、あの少年も粉々に――』

「誰が、粉々だった？ 白髪野郎共オ！！」

煙が晴れた先にいたのは、無傷のミカエルだった。
それだけでは無い。

口元には、張り裂けるような笑みが浮かんでいる。

ミカエルの言っている事は正しかった。
この場にいる者の内、三人が白髪だ。

テロツド、ギャラクシー、カストル……。

特に老けている訳でも無いのに、白髪とはどういう事だろうか？

『……ほう。面白い、面白いぞ。テロツドの全力を受けても無傷でいられるとはな……いいぞ、テロツド。殺してやれ』

殺してやれ、という単語にミカエルの顔が引きつる。

彼の脳裏に浮かぶのは、三週間前のあの出来事だった。

自分はかつての友人を殺した。

いかなる理由があろうとも、それを擁護する言い訳には出来ない。

この三週間、殺人の記憶を無理やり封じる事によって、罪の意識を消していた。

だが、それは間違いだったのではないだろうか？

ツライ事から目を背け、罪から逃げようとした。

それは、ただの弱虫だ。

そこまで考えて、ミカエルは腕に力を込めた。

とにかく、今は戦うしかない。

全力で向かってくる白髪少年——テロツドを相手に。

「俺と戦った事を地獄で後悔しろ。そして——、」

電波が、収集されていく。

ミカエルの能力の一つである、『電波操作』……理論やその他を無視し、電波を操る。

それらを腕に込め――。

「――地獄の果てで、幸運を――!!」

――噴射した。

テロツドの体がボコッ！ という不吉な音を立て、吹き飛ばされていく。

ギャラクシーはそれを驚愕の眼差しで見た後、的確に分析する。

『……電波を操った？……なるほど、これは面白い』
「それだけじゃないぜ」

そう言うと、足元に電波を集め、跳ぶ。
倒れているテロツドに向かって標準を定める。

「――これは能力じゃない、実力だ――そして、これが俺の実力の一つ――!! 『ゴッド』だ――!!」

言うなり、腕を振り上げる。

訳の分からない爆発音が響いた。

見た限りでは、何も起きていない——だが、

「ごっ、ばああああああああっ！？」

テロツドの悲痛な叫びが、響いた。

ギャラクシーの顔が、今度こそ驚愕に支配された。

「見ろよ！ この攻撃から、電波は感知されなかった——現代科学でも説明の付かなかった力だ！ だから、俺はこう名付けた……『神力』、ってな。人間が理解出来ないんなら、それは人間を超越した物って事だからな」

華麗に着陸し、驚くギャラクシーに向かって笑みを投げる。
そこら辺の電波人間では、ミカエルに敵うはずも無かった。

これが星流小学校のトップ。

『……先程の力……『異次元』の物ではないか——。それなら、現代科学でも説明の付かなかった理由が分かる……だが、何故奴が『異次元』の力を？……』

「ん？ 何だ……ブツブツと……」

ギャラクシーは答えない。

驚愕に支配された青年の頭は、声を遮断する程に考えに没頭していた。

『……だが、……先程の攻撃を見るに、そこまで強力ではなかった……もしも『異次元』の力を5%でも引き出せるなら……草むらは消し飛んでいるハズだ。　なら……』

そこまで呟き、顔を上げた。

見れば、激痛から開放されたテロッドが立っている。

『テロッド、リミッターを解除しろ。　生半可な實力では、アイツには勝てない』

『異次元』の力を扱える者がいるというならば……それは厄介ではない。

だからこそ、ここで潰すとギャラクシーは決めた。

『……リミッター解除……45%までの覚醒を開放。それ以降の開放は、許可無しには行わない……』

テロッドの中で、何かが弾けた。

雰囲気は、確実に変わった。

目の下にあるクマでさえ、何らかの意味を持つような気がしてくる。

それと同時に、テロッドが動いた。

脳が覚醒がした事により、常人では考えられないような動きを可能とする。

通常なら、『人間』という器ではそれを制御する事は出来ない。だが、『ウェーブマン』として特別な実験を施されているテロッドは、『通常』という前提に当てはまらない。

草むらを散らし、拳を振り上げる。

ミカエルの腹部へと、ただ一直線に。

「っ、あぎっ!？」

間抜けな声を発し、そのまま真っ直ぐ吹き飛ぶ。

人間の目に捉えられる、限界の速度でテロッドはそれへと迫る。

ムーの技術で生成された緑の剣を構え、真っ直ぐ振り下ろす。

ミカエルの体が更に飛んだ。

声にならない悲鳴を口の中で上げ、草むらへと墜落する。

「——っ!？」

次の瞬間、テロツドの上半身に痛みが走った。

何が何なのか、それすらも分からないまま、テロツドの体は宙を舞う。

そんな中、一つの声が飛んだ。

「俺の『実力』は、これだけじゃ終わらないぜ——」
『エンジェル 天力』!！」

訳の分からない咆哮が上がる。

それは宙を飛び、黄色の球体を頭上に構えたミカエルのモノでも、攻撃を受け、宙を舞うテロツドのモノでもない。

ミカエルの頭上に浮かぶ、黄色い球体から響いてくるのだ。

テロツドがその事実気付くと同時に、黄色い球体が射出された。ただでさえ、宙を舞っていたテロツドの体が、更に高く——そして、そのまま一直線に吹っ飛んだ。

ギギガガガガッ!! という、奇妙な音を発しながら、テロツドはギヤラクシーの近くに墜落する。
草むらが抉れ、命を散らしている。

『……空气中に存在する、様々な物質を集めて放った、か……。電波や粒子だけでなく、魔欠片^{マジックピース}といった、一般の人間には存在を知られていない物質も含まれているな……。見た限りでは、私ですらない物質も含まれていた……。本人も無意識の内に物質を凝縮し、放っているのだろうが……。私としては、『異次元』というある程度

は正体の掴めている先程の攻撃よりも、こちらの攻撃の方が未知数だ。未知数という意味では、『神力^{ゴッド}』と『天力^{エンジェル}』の名称を入れ替えるべきだと思うがね』

しかし、その言葉は誰にも届いていない。

届いているとしたら、横たわるテロッドとギャラクシーの隣にいるカストルだ。

その証拠に、テロッドは静かに立ち上がると、こう問いたのだ。

「……、なら……… どのような対策をすれば………？」

『私ですら正体を掴めないのだから……… 対策をしろと言われても困るぞ。お前の脳覚醒を引き上げれば、あの金髪が扱う未知数の物質を解析できるかもしれんがな』

テロッドはその言葉に頷くと、静かに銀色の剣を構えた。

静かに目を閉じ、そしてカッと開く。

そこにあるのは、ただ『覚醒』という二文字のみ。

『…… 65%まで開放…… ミカエルとやらを、今まで最も強力な敵として認識する』

テロッドの中で、再び何かが弾ける。

もはや、テロッドの動きは視覚では捉えられないレベルに達していた。

動けば、遅れて衝撃や音が周囲に届く。

そのレベルに達した怪物が、動き出す——それを止められる者はいない。

そう、通常なら。

テロッドは銀色の剣を構えたまま、音速を超えてミカエルに突進する。

常人の目では捉えられない動き——だが、予想外というのは常に隣にあるものである。

「残念、音速程度で俺を止める事は出来ない」

今度こそ、テロッドの目が驚きに見開かれた。
常識を超越した速度で走っていたハズだ。
それも、全力で。

だが、ミカエルはそれを止めてみせた。
剣を構えたテロツドの腕を片手で押さえ、音速から来る衝撃をも押
さえていたのだ。

テロツドは確信する。

ミカエル
化け物に、理論は通用しないのだと。

「俺の実力……電波核を活性化させる事により、身体強化を行う」
「」

言った途端、テロツドの腹部に激痛が走った。
思わず絶叫するテロツドだが、追撃が加えられる。

「見たところ、お前は電波に頼りきった戦い方をしているみたいだ
しな。俺の実力として、電波を操るモノがある。自在に操作し、
自分の思うがままに操る——ま、『操作』という名前の通り、消し
たりとかは出来ないんだけどな。　　——ただ——お前の電波を操作し、
お前の体内を乱す事は出来る」

『ウェーブマン』にとって、ここまでの天敵はいなかった。

『電波核』を宿しただけの、電波変換が可能な人間と『ウェーブマ
ン』は違う。

『電波核』以外にも、実験によって体内に様々な電波が存在する。

日常生活で支障が出ていないのは、何らかの防御があるかららしいのだが。

そして、その電波を操作されると戦力がダウンする。

特に、テロッドは脳の覚醒を——どういった理論かは不明だが——電波核で行っている。

その為、今のテロッドは体内に電波が行き渡っている状態なのだ。それを操作し、攻撃を加えられるとなると——あつという間にデリートされてしまうだろう。

「ま、電波の操作は対象に触れていないと発動できないんだけど…… ウェーブロードとかは電波を介して『触っている』っていう扱いになるから操作できるらしいんだけど、人体は触れてないとさすがに操作できないからな……」

これを応用すれば、『電波核』を持つ者を瞬殺できる。

何らかの防御を施されれば効果を失い、触れないと発動できない…… というデメリットはあるものの、これは凶悪な能力だ。

何せ、通常の電波人間相手なら触っただけで瞬殺できるのだから。

『電波核』と脳は基本、影響を与え合っているという説がある。

脳の電気信号が関係しているようだが、説を唱えた学者でさえこれは説明できていない。

だが、この説が真実だというのは50年前に証明されている。

『ザ・ファイブ・ウェーブ・バトル』にて、『電波核』を外部干渉によって破壊された者の脳は、潰れていたのだ。

脳と『電波核』の関係が深いことは明らか――。

『電波核』の電波を操り、『電波核』自体を崩壊させないのはミカエルなりの意思があるのだろう。

その気になればテロッドを殺されるというのに、激痛を与えるだけに留まっている。

「お前達は何をやっていたか話せ。明らか怪しかったからな――別に悪いことやってないなら、俺は立ち去るけどよ。こつやって襲ってきたって事は、バレたらまずい事やってたんだろ？」

テロッドは答えない。

激痛が治まった箇所を押さえ、殺意に満ちた目を向けるだけだ。そして、目を見開く。

『……限界開放……70%……命を犠牲にしても、『計画』を守る』

限界へと、遂に到達した。

活性化しすぎた細胞が逆に崩壊を始めてしまうような、そんなレベルだ。

骨が悲鳴を上げるような、そんなレベルだ。

そして、怪物に到達する。

「あああああッあああああああ！！！」

訳の分からない叫び声を上げ、テロツドの剣が振り上げられる。あまりの速さに空中を漂っていた電波が切断され、遠くに広がる草むらが一斉に切断される。

ウェーブロードがギシギシと音を立て、崩れ落ちる。

音速などといった速さではない。

何らかの機類を使っても捉えられるかどうか……そんな速さで、剣がミカエルへと迫っていく。

咄嗟に電波を掻き集め、透明なシールドを築き上げる。

だが、テロツドの剣はそのシールドに対し、優位に衝突する。

ギチギチッ……という不気味な音が鳴ったかと思えば、シールドを築き上げていた電波が切断されていくのだ。

ミカエルの顔が初めて焦りを見せ、『実力』の一つである『身体強化』を使い、テロツドと同じ速度で横に飛びのく。

そこに容赦なくテロツドの攻撃が叩き込まれ、クレーターが作成された。

ミカエルの行動を見ると、テロツドはそのまま足に力を込める。

ガッ——！ という音が聞こえた時には、テロツドは数百メートル移動した後だった。

それに気付いたミカエルは、空中の電波から剣を作り上げる。ミカエル自身に宿る膨大な電波を流し込まれ、剣が金色に発光する。

それと同時に、テロッドが持つ銀色の剣とミカエルの金色の剣が衝突した。

金と銀、その二つがぶつかり合う。

ゴガガガアッ！！ という衝撃音が辺りを包み、地面が抉れていく。宙に浮かぶウェーブロードが粉々に砕け、修復が追いつかない——修復される寸前で、粉々にされてしまうのだ。

このまま衝突させていても決着が着かないと見たのか、ミカエルが飛びのく。

だが、理性を失い、限界に到達したテロッドは本能的にそれを追いかけるのみ。

銀色の剣を不気味に輝かせ、ミカエルの殺害を最優先とする。

そう、自らの命を投げ捨ててでも殺すつもりなのだ。

ミカエルはそれを見ると、金色の剣を再び構えなおした。

空中の電波を操作し、テロッドに攻撃を与えようと、電波が切断されて終わるのみ——なら、単純な威力で決着は付く。

だが、衝突はしなかった。

テロッドの体が不気味にゴキチギッ！ と音を立て、そのまま自然な方向に折れ曲がったのだ。

上半身と下半身が、ともに接続されていない。

更にチキッ…… という音を立てて、腕が変な方向に曲がる。

それを見たギャラクシーが、テロツドの頭を掴んだ。

限界に到達したテロツドを抑える為の『薬』と呼ばれる、一種の電波を流し込んでいるのだ。

間もなくして、テロツドが気絶した。

しばらくその体を見下ろした後、ギャラクシーは笑って見せた。

『……面白いぞ、お前。 名前は？』

「オ、ベラ……」

『なるほどな。 周波数の匂いからして、星流小学校所属か……いや、『元』といった方が正しいな。 私の名前はギャラクシー。』

この世界を、手中にする者の一人だ。 邪魔をしたいなら邪魔をする。 地獄の果てまで追いかけてでも、な……さて、下準備はもう終わった。 帰るとしよう』

それと同時に、ギャラクシーの体が消え去った。

幻視かと思うミカエルだったが、何度頬を抓っても、ギャラクシーは現れない。

遠くを見れば、カストル達も消えている。

「……ギャラクシー、か。 見た所、いい奴じゃなかったな。 口ぶりからしても、悪い事しようとしてるな……なら、事は簡単だ。 準備が整い次第、奴を徹底的に妨害するまで……ギャラクシー達の気配は？」

『ああ、しっかりと記憶してある』

「よし……お前の能力があれば、ギャラクシーがどこに行こうが捉える事が出来る。後は、時間をかけて戦力を整えるのみ。見た所、あいつはあの白髪よりも強そうだから……今の俺じゃあ、絶対に勝てない。それにしても……俺、白髪に負けたも同然じゃねえかよ……相手が自ら立ち去るなんて、ナメられてるじゃん」

その声は、虚空に吸い込まれていくのだった。

『cord number 0A』 1

数年前。

『ゼロラグナ』の任務によってコダマシティへと向かったベガは、
一人の少年と出会った。

それが、ベガの友となる少年——ロキだったのだ。

全てはそこから始まった。

『cord number 08』の前日譚、『cord number 0A』・『cord number XZ』。

——全てを手に入れ、そして、全てを失った。

コードナンバー008、エイトは『ゼロラグナ』本部——の入り口付近に設置してある椅子に腰掛けていた。彼の視線は手元のハンターへと向かっている。

『コードナンバー008へ

ボスからお前に任務の要請が入った。
向かう場所はコダマシティ。

時刻は午後六時、だ。

内容は『見回り』。

『ゼロラグナ』から連絡が入るまで、コダマシティに点在せよ。

コダマシティの治安を守るモノが全て、サテラポリスによって他の任務へと移された。

町を守る為のセキュリティシステムもほとんどがサテラポリスによって回収された。

故、我らに仕事が回されてきたという事だ。

それと、ボスはお前を学校に潜入スパイとして送り込むようだ。

その時の為に、偽名を与えておこう——ベガだ。

では、健闘を祈る

016
』

コードナンバー

コードナンバー008、エイト——いや、これからの任務ではベガだ——はハンターをベルトに挟むと、ゆっくりとした拳動で立ち上がった。

常に無気力な目は面倒臭そうな視線を出口へと送る。

——現時刻は五時三〇分

ここから、全てが始まった。

『異次元』——より正確に言えば、『高次元』だ——と呼ばれる世界が存在する。

ベガ達の世界に最も近い世界だ。

全てに置いてベガ達の世界を超越し、内には超絶的な力を持った『導間』という存在が住む。——導間達は、人間達に『異次元の存在』と呼ばれているようだ。

導間はそれぞれの世界に対応する事が可能だ。

例えば、『異次元』では導間の姿、人間の世界では人間の姿……といった具合に、世界の環境に応じて姿が変わるようになっている。

そして、そんな『異次元』の一角を、『彼』は駆けていた。

姿は、真っ白な光で構成された人型に、黒い翼が生えた物である。とにかく、奇妙な光景だ。

それを追い掛けるのは、同じく『異次元の存在』である。
一〇〇二〇程いるだろうか？

やはり、人間の目から見れば奇怪な姿をした者ばかりである。

中には、象が二本立ちしたような姿をしている者までいる。

『彼』は思考する。

（従って堪るか——！ 人間を使い捨てにするなんて、従って堪るか——！）

『彼』の名は——いや、コードネームは『ロキ』。
導間は全員、『何者か』に付けられたコードネームを持っている。

そして、——本名を忘れてしまっているのだ。

故に、コードネームを名乗るしか無い。

とにかく、『彼』は駆けていた。

『異次元』の中には、二つの派閥が存在する。

一つはオーディン率いる派閥。

一つはゼウス率いる派閥。

二つは共に話し合い、『異次元』を管理している。

例を挙げると、国を管理する政治家達のようなモノである。

そして、その話し合いによって——人間を使い潰す事が決まった。

結論を言うと、人間の住む世界が全て——滅びてしまうのだ。

『冥界』と『異次元』に挟まれる世界も、『ガイア』と呼ばれる組織が活動する世界も、『結界』によって一人の少年が『ある人物』からの干渉を防いでいる世界も、『ナイトメア』と呼ばれる組織が活動する世界も、時を渡る能力を持った者や、電波体の組織が存在する世界も——一つ残らず、全て利用されて消える。

そんな事は認めない。絶対にだ。

ロキの考えでは、『裏』が存在する。

オーディンとゼウスは少なくとも、そういった決断は下さないハズだ。

『異次元』の中には人間差別主義者もいるが、彼ら二人は絶対に違う。絶対にだ。

なら、——その二人を動かした『圧力』がある。

第一、『異次元』の力が全て動いた所で、人間の世界を全て潰す事など不可能だろう。

さすがに、そこまでの力は持っていない。

だというのに、何故そんな無茶な決断を下した？——。

やはり、『裏』があるはずなのだ。

それが何かは分からないが、ロキはそんな事は認めない。

人間を得体の知れない計画の為に利用するだけ利用した上で潰すなど——絶対に許されるべき事ではない。

だから彼は裏切った。

オーディン派閥の中でもかなり重要なポジションを勤めていたが、それら全てを捨ててまで、人間の世界を救おうと決意したのだ。

その為に選んだのが――、

――人間界に行く事。

噂では、ここに最も接している世界には、『異次元』を打ち破れるだけの『ナニか』があるらしいのだ。

なら、それを利用する。

当然ながら、ロキの動きを察した『異次元』側も黙ってはいなかった。

ゼウス派閥は「お前の部下の責任はお前で取れ」、といった具合で動かなかったが、当然ながらオーディン派閥は動く――その結果が、コレだ。

『クソッ!! 裏切り者め!!』

ロキの放った閃光を避け、追っ手が毒づく。
が、ロキ自身の体はかなり傷だらけだ。

常にフラフラしているし、足取りもおぼつかない。

それを見た追っ手は、静かに雷の槍を構えた。

トール、とロキは小さく呟いた。

ロキやオーディンもそうなのだが、導間は『北欧神話』等、人間から作り上げた神話からコードネームを取られる事が多い。——ロキはコレに『圧力』の秘密があると踏んでいるが、それについては一切の確証が無い状態だ——。

そして、トールもそれなのだ。

しかし、この際、それは置いておこう。

大事なのは、トールが『異次元』の中でもかなり恐れられている凄腕だという事だ。

……そして、トールは自分の親友だという事だ。

『なあ、トー、ル……オマ、エは――』

『……裏切り者を捕獲する準備をしておけ。俺様が一撃で仕留める』

淡々と指示を告げるトールの声に絶望した、その矢先だった。
グシャッ、と更なる絶望がロキに襲い掛かる。

雷撃の槍がロキを貫いた。

『ぐ、あ……』

通常なら、これだけで倒れているだろう。
だが、ロキは立ち上がった。

トールを見て、ますます決意を固めた。

絶対に『異次元』を変えてみせる。
だから、今は耐えるべきなのだ……と。

友人に対する失望も何もかもを押さえつける。
仕方が無い、とロキは思った。

トールだってやりたくてこんな事をやっているハズでは無いのだ……
だから、自分が『異次元』を変えれば、トールも苦しまなくて済む。

そう結論付けたロキは、再び背中を見せて走り出した。

今の一撃でロキが倒れる、と踏んでいた為、追っ手達は驚いていた。

そして、驚愕のあまり、一步も動けなかった。

結果、ロキは人間の世界へと繋がるゲートをこじ開け、その中に飛び込んでいった。

連絡を受け取ったオーディンは、新たな命令を下す。

『ロキの事は放っておくでしょう。ヤツが人間の世界に行こうが、コチラには関係が無い。てっきり、ヤツが『異次元』にクーデターを仕掛けるとばかり思っていたが、単なる人間界旅行に行きたかっただけのようだな』

皮肉を混ぜ、オーディンは頷く。

それを聞いたトールは静かに頭を下げた。

『それと……、ヤツには『悪神』の称号を授けよう。 忌々しく、『異次元』全体から疎まれるような称号だ。 悪神、ロキ…… 『異次元』の者達は彼を反面教師とし、間違いを犯さぬようになると良いな』

トールは顔を上げた。

そして、オーディンの言葉には何も答えず、背を向ける。

心の中で唸る複雑な感情を押さえつけ、彼は仕事に戻っていく。

コードナンバー009。

リゲ、という偽名を持つ彼の視線はハンターに向けられていた。

そこに書かれていたのは、コダマシティを見回りせよといった旨の物だ。——コダマシティに点在し、コダマシティで事件が起きたら解決しろ……という意味だ——。

リゲは立ち上がる。

ツンツンに尖った赤髪が風を受け、揺らいでいた。

現在地はコダマシティ——の集団墓所である。

彼はハンターを仕舞うと、一つの墓へ視線を向けた。

リアルウェーブで構成されたブロックには、『英雄達の眠り』と書かれている。

ザ・ファイブ・ワールド・ウェーブバトルで活躍した者達の死体が埋められているらしいのだが。

リゲは観光地でもあるこの場所に、一度は訪れてみたかったのだ。

そして、観光を済ませた後は——点在地の確保、つまり泊まる場所を見つけないといけない。

ロンシャ編開始と同時に、執筆ペース上げる予定です。
今回の過去編更新は単なる息抜きなので、これからも続けて更新する
ような事は無いと思います。

つまり、過去編はロンシャ編開始と同時に本格的に始まるので、そ
れまで楽しみにしててくださいね！！

って事です。

……あー、修正作業が面倒臭い……。

降る流星（前書き）

——とある商人の語り。

「え？ ギャラクシー君……ああ、あの子ね。良く覚えてるよ。しょっちゅう僕の店に来て、パンを買って行ったからね。フランクパンとクロワッサンがお気に入りみたいだよ。え？ 聞いているのはそこじゃないのか？……そうだねー。ギャラクシー君は良い子だよ？ お釣りを渡したら愛想良く笑いながらありがとうございます、って言うし礼儀正しいよ。この前だって、僕が店の道具落とした時に拾うの手伝ってくれたんだよ。僕がありがとう、って言ったらさ。彼は「これぐらい、当然の事です」って言ったんだよね。ほんと、両親は良い息子を持ったよ。ウチの反抗期の子供と変わって貰い——（必要の無い事なので以下略）」

——前学校の担任の語り。

「ん？ ギャラクシー君？……ああ、あの子なら一週間前まで私の

教え子だった子ですが……？ 彼について、ですか。……結論を言
ってしまつと、ウチのクラスの中じゃ一番良い子でしたね。正義
感はあるし、成績も優秀ですし。正義感行き過ぎた所あるかな
ー？……何ヶ月か前なんて、轢かれそうになつた子猫を助けて入院
してしまつた程ですよ。ほんと、残念だなあ……何で転校してし
ま——（必要の無い事なので以下略）」

——テロッド語る。

「……ギャラクシー様か。今から二〇〇年前——ギャラクシー様が
一四歳の時に、何かがあつたようだが……俺は追及していないな。
あの方はどうも、それについて追求されるのが嫌らしい」

——アレッサ語る。

『下劣な猿でしか無いわ』

——流星スバル語る。

「死んだ方が良いね。お願いだから死んでもらいたい。でも、心配する事は無い。必ず、死ぬんだから……僕の計画によってね」

——ウォーロック語る。

『頼む、その事については止めてくれ……』

——とある男語る。

「フフツ。……永遠に私の掌で踊り続けるさ……永遠にな」

——事情を知る者、言う。

「……彼は良い人だったよ。本当に。誰がどう見たって、善の塊だったような男だ。少しばかりとろいが、それでも困った人は置いておけないような性格だった。まったく、所構わず助けるせいで迷惑被る俺たちの事も考えろ、って思ってしまう程だった。……だけど、な。アイツは変わったんだよ。別に、誰のせいという訳でもない。そりゃあ、間接的に関わった悪の塊はいるが……それでも、変わったのはギャラクシー自身だ。あくまでも、悪の塊は間接的にしか関わっていない訳なんだからな。——あの日からだ。アイツが狂ったのは。——」

降る流星

二〇〇X年、スペラド。

かつては『太陽の沈まぬ国』として栄えていたこの国にも、遠く離れたジャパニーズの情報が入ってきていた。

少年、アントニーも携帯端末P E Tでその情報を受け取っていた。

『——光熱斗とロックマンエグゼ、W W W事件とゴスペル事件に引き続き、W W W第二次事件を解決。この二人の活躍はどこまで行くのだろうか』

ここ最近、話題になっている事柄なのだ。

この一年間の中で、三度にも渡って大きな事件を解決し続けてきたオフィシャルネットバトラー、光熱斗。

アントニーは学校に通う道の中、目を輝かせながらP E Tの文面に目を走らせる。

歳相応の表情、といった所だろうか。

古来から『ヒーロー』という物は子供達の憧れであり、同時に形は違えども大人達の夢でもある。

その『ヒーロー』を、『憧れ』を、『夢』を目の前に提示されたのだ。

高揚するな、という方が無理である。

この一年間、ずっと世界の話題はこのヒーローで持ちきりだ。そしてまた、このスペラドも例外ではない。

——一人の少年を除けば。

ガタゴト、ガタゴトと体全体が揺さぶられているようであった。

しかしながら、揺られている少年自身は、そういった事には一切の関心が無い様子で、鞆を持って中学へ急ぐ少年達を窓から見ていた。

運転手はその様子を見ると、首を少年の方に向けながら、にこやかに笑いながらこう言う。

「なあなあ、君。酔わない体質かい？ さっきから外を見てばかりだけど」

対し、少年はぼんやりとした瞳を運転手の顔へと向けた。
それから、小さくこう言う。

「景色は良い……人に感動を与えてくれる。人の思考に揺らめきを与えてくれる。だから、僕は景色が好きだ」

「なるほど。面白いね、君の考え方。えーと……。」

顔を上に向け、唸り始めた運転手を見ると、再び窓へと視線を移しながら少年は答えた。

「——ギャラクシーで良いよ」

「そっか、そりゃあ変わった名前だな……アメリッパとかじゃ銀河って意味かな？」

「……そうだね、そういう意味だ。お爺ちゃんが僕の事をそう呼んでたんだ」

言っと、ギャラクシーはそれ以上何も言わずに外を見続けた。運転手は黙ってハンドルを操作するが、再び視線をギャラクシーへと移す。

「……うーん。君、変わってるね？」

「——良く言われる。ほんと、ウンザリする程にね……そうさ。どうせ、僕は変わり者だよ——何なら、笑ってなくても構わないんだよ?。」

「そんな悲しい事言うなって……いや、君の様子からすると大真面目で言ってるのかもしれないけどさ。……何か、君ってクラスに一人は居そうな博識クンって感じだよね——おっ、到着したぞ。君の転校先に」

本名不明である少年、ギャラクシーは至って普通の容姿をしている。艶のある銀髪に、別に浅黒くも青白くも無い肌。

服装も現代の子供と何ら変わらないセンスをしている……という訳でも無いが、引かれるような服装をしている訳では無い。

流行に乗っていないだけで、別に普通の服装だ。

二つだけおかしな点があるとすれば、彼の雰囲気と目だろうか。

どこかぼんやりとしたような、とろんとした青目。

そして彼から発せられる空気はまさしく、『薄鈍』うすのろといった感じであった。

そんな彼は現在、白い門の前に居た。

自動ロックが掛かった、学校のセキュリティードアである。

今日からここに転入する事になったのだが、彼の隣には保護者らしき人物が居なかった。

先程の運転手との話から察するに、保護者は祖父と見受けられるのだが――何らかの事情があるのだろう。ギャラクシーは一人で、迎えの教師が来るのを待っていた。

彼の青い目は始終あちこちに動いており、とにかく落ち着かない。どうやら、運転手に話した事は本当のようだ――「景色は好きだ」と。

と、そこでバタバタと慌しい音が聞こえてきた。

ギャラクシーは反射的に顔を上げる。

スーツを着込んだ青年が、ドタドタと駆けてくる所であつた。

ギャラクシーは特に表情を変えず、他人から見れば「眠そう」といった顔をしている。

これがギャラクシーの素だ。

別に眠い訳でも何でもなく、普段からトロいのである。

門を開け、ギャラクシーの下にやって来た青年は三度程ペコペコと頭を下げると、ついでにもう一回頭を下げてから……ようやく話を始めた。

頭を下げられても尚、やはりギャラクシーは無反応である。

「ゴ、ゴメン！ ちょっと遅れちゃって……。君がギャラクシー君
だろ？ 本当にすまない！！」

「キミ、僕の教師？」

「そうだよ。正確には、君のクラス全体の教師なんだ——新米だから、色々足りない所が多いけどね。そこら辺も含めて、よろしくお願いするよ。じゃあ、行こうか」

——今日この日、運命は動き出した。敷かれたレールの上を走っていた列車が、スピードを上げたのだ……。以前から運命は動いていたものの、この日を境にして……。運命は急加速する。

中学二年、レーヴは自分の教室——二年B組にて、憂鬱そうな表情をしていた。

先程からずっと担任を待ち続けているのだが、——来ない。

それを良い事に周囲の生徒は騒ぎ出すし、とにかくレーヴは鬱だつた。

(……チッ。……何でも騒がしいんだか……)

心の中で思いながら、彼は窓の外を見る。

騒がしく、五月蠅い人間達の中に居ると、こうして気を紛らわすしか無くなる。

とにかく苛々を押さえ込もうと格闘を続ける中で、ようやく扉が開いた。

教師の中ではかなり若い先生は何ら変わっていないが——遅刻している事も含めて、だ。いつも通り過ぎる——その隣に銀髪の少年が居るのを見て、レーヴは眉を顰めた。

(そういや、転入生が来るって周りが騒いでたな……まあ、いい。
俺には関係ない)

自己完結すると、レーヴは再び景色を眺める。

先生が来たせいか、周囲の生徒は慌てて着席し出す。

それを確認すると、先生は大声で告げた。

「今日から皆の仲間になるギャラクシー君だ。この地域の事は良く分からないから、皆よろしくな」

そう、自分には関係ない。

——そうだ、関係ない筈なんだ……。

「——レーヴ、お前が面倒見てやってくれよな！」

「……は？」

この日、やはり運命は急加速していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3013j/>

ストーリーコレクト

2010年10月15日21時06分発行